西加茂の靈源寺は、後水尾天皇の勅願寺、佛頂國師一絲和尚の開基である。方丈は一風變つた重層瓦葺で、お正月のお鏡餅のやうな感じのする屋根である。

後水尾天皇の御法體の御尊像はかしこくもいと尊く拜される。一絲和尚の等身像は顏面白く痩せがたで、いかにも神經質らしく見えるが、貴族の出身はあらそはれぬもので、いはれぬ氣品がそなはつてゐる。

そこから少し離れたところに有名な正傳寺がある。正傳寺は支那僧兀庵普寧が開山といふことになつてゐるが、實はその弟子の東巖和尚の開いた寺で、龜山天皇の御祈願所である。元寇の際、東巖和尚が龜山天皇の勅を奉じて敵國降伏を祈つた祈願文は、國寶として現存してゐる。門を入つて林の間をだらだら上りに曲折數町すると、翠微に倚つた殿堂は桃山御殿の遺構で、方丈、唐門ともに國寶建築物、その格天井は桃山の粹を見せて美しい。前庭は遠州好みの枯山水、襖の繪は山樂である。正面の昭堂内には兀庵禪師の巨像を安置し、「大宋特賜宗覺禪師」の勅額堂々として頗る禪林の古格を存してゐる。ただ靈源寺に於いても、ここ正傳寺に於いても、つくづく感ずるのは、「寺は尊し、守る人いやし」といふことである。歸りの道すがら慕末の歌人蓮月尼の墓に詣で、紫野に出て大德寺にたち寄り、大燈國師の塔所雲門庵に禮してこの日の行を終るとともに、今度の旅も一先づこれで打ち切つて歸京した。

旅に見る秋の寺々

學校參觀

今年（昭和十四年）の秋十月の中つ方、高等師範部國漢科四年生三十名を引き連れて京都見學の旅に出た。同行の川田雪山教授と寢臺車に納まり、棚の上に横たはつてぐつすり一眠りしたかと思ふと朝になつて、下段に寢てゐた雪山先生に起された。汽車は狹霧の近江路を走つてゐる。顏を洗ひ服裝を更めて、一休みしてゐると、學生代表が朝の挨拶に來る。京都に着くと宿から迎へが來て居り、タクシーに分乘して三條の旅館につく。朝食を濟まして見學の日程に入り、先づ府立第一高女の參觀に出かける。第一高女は仙洞御所の裏手にあり、そのあたりは昔の京極殿道長の屋敷跡で、環境はまことによく、明治七年の創立は女學校中での最古のもので、而もその近代的設備はまことに至れり盡せりである。國語と作文との授業を參觀し、校内の施設を巡覽し、去つて府立第二中學に行く。ここは東寺の附近で、タイル張りの堂々たる校舍は嚴として兵營の如く、生徒の着てゐる國防色の制服も凛々しい。ここには早大出身の先生が二人ゐて、いろいろ

斡旋の勞を執つてくれられた。午前午後に亘つての二校の參觀で、見學第一日の日程を終り、旅館に歸る。夜は學生の主催で京都中等學校在職の高師部先輩諸氏を旅館に招いて懇話會を開き、秋の夜の更けるのを忘れた。

妙喜庵と圓福僧堂

見學第二日は學生各自の自由行動に任せ、それぞれ思ひ思ひに京阪の名所舊蹟を訪ねることになつた。私は豫ねて山崎の妙喜庵を訪ねたいと思つてゐた處、同行の川田氏が妙喜庵の老僧と心安い間柄との事で、その日の午前に同氏に伴はれて京阪電車で山崎に行き、驛の傍らなる同庵を訪れたところ、老僧は已にこの世を去つて、今は息子の若い住職の代になつてゐた。ここの客殿は室町時代の建築で瀟洒とした數寄屋造り、それにつづく書院は桃山時代の建築で、古雅な、やや重苦しい感じのする座敷、その右前のところに構へた茶室は利休の好みで、山崎合戰の時、秀吉が立寄つて一服の風流に戰塵を忘れたといふ由緒ある茶席、その傍の老松は太閤の鎧ずれの松として名高い。建物はいづれも國寶である。すべてがささやかで雅味のあるのがこの庵の特色で、破風屋根の勾配の緩やかさ、廣緣を思ひ切り深くとつたあたり、それと腰高障子との釣合ひもよく、何ともいへぬ落ついた感じである。

内部は十二疊と十疊の二間よりなり、奥間に南面して佛壇が設けてある。佛壇の造りは後世の

らしく、この建物とは少し調和を缺くほど粗末なものである。この事は襖についても云へる事で、それだけの古い建物には建具なども相當に注意して調和あらしめないと折角の美觀がそこなはれる虞れがある。山崎宗鑑の遺蹟としては、もう少し風雅に住みなして貰ひたく、この場合にも住僧の教養といふことが問題になつて來ると思ふ。寺は臨濟宗東福寺末である。

辭して數町行くと、一民家の裏庭に宗鑑の井戸と稱する筒井筒の井戸がある。宗鑑は俳諧連歌の祖として名高く、ここ山崎の妙喜庵に住し、一休和尚に參じて禪を修し傍ら茶道にもいそしんだらしく、この井戸は恐らく茶の湯の水となつたのであらう。家人に乞うて一杯の水を喫し、それより水無瀬神宮に詣でる。このあたり、今はさほどの好風の地とも思へぬが、古くは惟喬の皇子の昔より、中比は後鳥羽天皇の御代に至るまで、水無瀬は離宮の地として名高く、伊勢物語、増鏡に於いて親しみのある場所である。殊に後鳥羽天皇の「見わたせば山もと霞む水無瀬川夕は秋となに思ひけん」の御製に一際映えて、忘れがたき地とはなつてゐる。神宮は近く改修されて木の香新しく、神々しさいふばかりなく、今は後水尾上皇御遺愛の茶室も移し据ゑられて、京阪人の獻茶の式も絶えず行はれてゐる樣子である。そこから程遠からぬ處に楠公櫻井の驛の古蹟があるのでそこをも訪れ、川田氏と別れて、淀川の渡しを渡つて對岸の堤に出た。觀れば山崎天王山のあたり山容なだらかに、所々黄葉をちりばめていはれぬ風情である。

淀川堤をバスで京阪電車の八幡驛に行き、そこから更にバスに乘り換へて志村に行き、十數町

徒歩して圓福寺に着く。途中、柿の木多く、枝もたわわに實れる柿を市場にでも運ぶのであらう、里人がしきりにもいでゐるのが目についた。山を切り開いたやうな道をだらだら下りに下つたところに、「江湖道場」の扁額いかめしき樓門を仰ぐは、これぞ圓福の僧堂である。圓福僧堂の名を聞くこと久しくして訪れるは今日が始めて、先づなつかしきは僧堂の奥深く齋き祀れる達磨の尊像である。聖德太子片岡の達磨の傳說もここにその跡を止めて、今は達磨宗の道場とはなつてゐる。案内の雲水は私を達磨堂に案内するや香を薫じて一しきり大悲呪を讀誦するので、私もこれに和した。近くよつて拜めとの事であるが、水引戸帳に隔てられた大師の尊容は、にぶき光線のために、さやかにそれと拜むべくもない。達磨堂の前が禪堂で、江湖道場の名にふさはしく、その規模も大きくして廣い。ここに一年も籠つてみつしり坐禪したらばと思ふが、今の我が身にはそれも叶はず、修行はすべき時にして置くべきものとつくづく思ふ。僧堂に並ぶ本堂、これも大きいが、極めて素樸な建物で見た目はさほど美しくない。その傍に南天棒願かけの松といふ老松が一本立つてゐる。明治の禪傑、南天棒鄧州和尚ここで修行中、大事了畢をこの松に誓つたとのことである。奥の小高い丘に導かれる。そこは墓地になつてゐて、その一角に數基の卵塔婆がある。私はその中の一基に額づいた。それは前の大德管長、松雲室見性宗般禪師の塔である。私はこの老師に東京で度々お目にもかかり、提唱なども度々伺つたことがある。その墨蹟も尙藏してゐる。今一休といはれた臨濟近來の名僧で、圓福寺今日の輪奐の美も恐らくこの和尚の功績で

あらう。和尚の居室、松雲室もそのまま殘つてゐる。更に導かれて奥の客殿にゆく。そこは有栖川宮家の御殿の一部を移したもので、この山中に高貴の氣品をたたへた幾棟かの宏壯な建物があるのは尊くもまた珍らしく、ここにも松雲室の遺德が偲ばれるわけである。展望はるけき大自然を取り入れた庭の眺めもこの殿閣にふさはしく、まことに天下の大叢林たるに恥ぢない。

松花堂の舊居

歸途、志村に松花堂の舊居を訪ふ。この舊居は、今は西村某氏の私有になつてゐるが、もとは石清水八幡宮の社僧、松花堂昭乘の住坊で、瀧本坊と稱して石清水にあつたのを、明治初年ここに移したとのこと、建物は桃山の遺構といはれてゐる。玄關及び入側付の書院二間は桃山文化の香り高く、四百年の風霜に寂び、再度にわたる高貴の行幸に尊さを添へ、世にすねたる隱逸の居宅としては贅に過ぐるの感なきを得ぬが、關白秀次の遺孤と傳へられるその出身から考へて見ると、必ずしも贅とのみは云へぬであらう。居宅の風雅もさる事ながら、その庭の美しさ、また一入で、一木一草一石一塊、皆その處を得て布置面白く、動かすべからざる落ちつきを見せ、殊に全庭の眼目ともいふべきは横枝みごと空間に一文字を引ける老松と、それに並んで塔のごとく空に沖れる槇の大樹で、この槇は樹齡まさに三百年、日本一と京都府が折紙つけた名木とのこと。庭からの眺めまた開けて、足穗田を越えて遙に宇治の山々を見はるかす趣き、何ともいへぬ風情

である。茶席松花堂には昭乘の畫像をかけ、遺愛のつくばひは昔ながらに淨水を湛へ、昭乘自筆の松花堂の扁額は今はとり脱して書院の棚に大切に保存してある。松花堂昭乘は繪を能くし、書を能くし、和歌に巧みに、茶事に長け、當時の名流との交遊も廣く、澤庵和尚とも親しく、その合作の書畫の今日に殘るものも尠くない。

寶珠院墓參り

その翌日、私は川田氏と別れ、單獨で大阪に行き、此花區吉野町に影久賢一氏を訪ねた。同氏の令息故博君の墓參のためである。影久博君は早稲田の第一高等學院で私の主任をしてゐたクラスの學生であつたが、學院を卒業して大學の政經學部に入つた年の夏、不幸にして病氣のために亡くなつた。その年の十月、級友が我が禪庵に集つて同君の追悼會を行ひ、その父君の影久氏が遥々大阪から出て來られ、私はその時以來影久氏と識つて文通をしてゐたが、今度入洛を機會に亡き數へ子影久博君の墓參りを思ひ立つたのである。墓は寺町の寶珠院といふ眞言宗の寺内にあつた。私は影久氏夫妻に案内されてその寺に行き、御影石の墓となつた故人に久しぶりで對面した。影久君は學院時代に鎌倉の圓覺寺に行つて坐禪をやつたことがあるので、云ふことがいつも他の學生と變つてゐて、級中の一異彩であつた。學院を修了した年の春、二三の級友と京都で私を迎へてくれ、一緒に祇園の櫻を見に行つた時のこと、その年の夏休み前、大學の正門前で見か

けた後姿など、今も私の記憶にまざまざと殘つてゐるのに、かうしてここに立てば目の前にあるはただ一基の石碑！　思へば感慨無量である。

それから本堂にお參りをし、影久君の位牌に燒香し、書院に通されて若きお住持に初對面の挨拶を交はした。寶珠院は眞言宗の別格本山として由緒ある寺院で、底光りのする落ちつきのある立派な建物である。

影久氏夫妻の厚意で、それから大阪の星ケ岡茶寮に招かれることになり、寶珠院のお住持も御一緒にといふことで法衣を更め、颯爽と背廣姿で一行に加はり、四人一つ車で行く。お住持はその宗門での新人といふ型の人で、齒切れよく物を話す人であつた。茶寮の日本間は例の數寄屋造りで而もからりとして手廣く、大瓶に柿のびつしり實つた大枝を一本ぶつ込んだ投げ挿も面白く、床の軸は大德寺大綱和尚の和歌であつた。庭に下り立てば一面の芝生は黄ばんで處々に秋草を交へ、築山の蔭には水を堰き入れて舟が繫いである。座にかへれば、奥行深き大床を持つ廣間に卓がしつらへてあり、星ケ岡特有の珍味が運ばれ美酒が置かれ、主人夫妻の心づくし、まことに味はふに盡きせぬものがあつた。

信貴山毘沙門天

影久氏の厚意はそれにとどまらず、私を更にどこかに案内したいといふのである。文樂、松茸

狩、奈良見物等々數へ擧げてくれられたが、結局信貴山はどうかといふ事になつた。京阪の名所一通りは歩いてゐる私であるが、信貴山にはまだ參詣したことがなかつたので、厚意に甘えることにした。幸ひ同宗の關係で寶珠院のお住持が信貴山をよく知つてゐるといふので、同行してくれられる事になり、よき頃に茶寮を切り上げて信貴山へと志す。途中で夫人は歸宅され、影久氏と寶珠院師と私と三人、大軌で信貴山へ向ふ。信貴山驛に着いてケーブル・カーで山上に登る頃は秋の日は落ちて大和は暮れかかつてゐた。信貴山孫子寺は三つの坊から成り立つてをり、その一坊の玉藏院といふにその夜は泊る。靜かな山上の僧房で、精進料理の夕食が終ると寶珠院師は翌日寺用があるとの事で一人大阪に歸つて行かれた。後に殘つた影久氏と私、ほんとに靜かな山の坊で差し向ひになつた。この時何を語り何を問ふべきか。曾て影久君の追悼會が我が禪庵で行はれた時、上京された父君影久氏は、會が終り、人々の去つた後、禪庵の一室に私と對坐した時、「自分は今まで惡い事をした覺えはないのに、何故に長男に先立たれるやうなこんな悲しい目に出合はねばならないのか」と私に訊ねられた事があつた。私はその時云つた筈である。「何事もこの世一つのことではありません。御子息の逝去も前世の宿緣とあきらめるより外ありません」けれどもさうは云ひながらも、それを影久氏に强ひるに忍びない私であつた。

今この山上の僧房で、ゆくりなくもただ二人、人無き室に對坐して影久氏に私の問ひたいことは、亡き博君のことであるが、しかしこれはどうも口に出して云ひにくい。悲しい記憶を新に呼

び醒ますことになるからである。影久氏も恐らく亡き息子のことをこの際話したかつたであらう。しかし、それもやはり口に出しては云へぬらしい。で結局、世間話になつて行き、その夜はそこに、二間續きの大きな室の上の間に私を寢ませ、襖隔てて次ぎの廣間に影久氏は横になつた。

翌朝は十五日、未明に本堂で大般若が勤まるといふので、曉の鐘を合圖に飛び起きて、坊を出て、外燈ほの暗き石磴を上下して二町ほど離れた處にある本堂に辿りつく。ああ此處こそは私の日頃の念持佛大毘沙門天王の靈場である。「唵吠室羅摩拏也婆訶」と念誦しつつ寶前に額づく。内陣では今し大般若經轉讀が行はれるところ、拜堂にはぽつぽつ參詣人の姿が見える。その中に影久氏も見えた。

經の終るを待ち、内陣に案内されて、前立ちの毘沙門天王を拜み、宮殿の奥深く齋かれ給ふ御本尊を念じ、信心肝に銘じて引き退つた。毘沙門天を拜むと現世利益を求めるやうであるが、禪の立場からすれば、何を拜んでも差支へない。理の上からすれば拜むべき何物も無い代りに、事の上からすれば何を拜んでもよい。殊に寺門の經營には天部の諸尊を拜むがよいといふことを、近世禪林の傑僧、相國寺の獨園和尚は云つたといふことである。だから相國寺には神變大菩薩役行者が祀つてある。役行者の背後に藏王權現のあることはいふまでもない。

中宮寺の觀音と西大寺の愛染明王

その朝、山の上で影久氏と袂を分かち、同氏は大阪へ、私は山を下つて王寺驛に出で、乘合で龍田を經て法隆寺に行く。ここは曾遊の地とて昔ほどの感激もなく、夢殿は修理中とて近寄れず、金堂、講堂、寶物殿を一巡して中宮寺を訪づれ、かの有名な中宮寺の觀音と天壽國曼荼羅とを拜む。この佛は實は觀音ではなくて彌勒であるといふことであるが、それがむしろ自然で、さうすれば當然、天壽國は兜率の內院といふことになるであらう。さるにてもこの美しき金銅佛は堂のささやかなるに比して佛體が大きく、且つあらはにお姿を示現して間近に拜むことが出來るので、尊くもまた恥かしく、案內の若き尼僧に對すると同じやうな遠慮が感ぜられるのである。人の心はふしぎなもので、帳とばり幾重隔てた奧に祕められてゐる佛であると、それを揭げつくしてでも中を覗きたく思ふものであるが、この佛のやうなあからさまなる御姿に對すると、いつまでも眺めてゐられぬやうなはにかみが感ぜられるので、そこそこに辭して歸りしなにふりかへれば、この寺は尼寺にふさはしき物靜かな、しかも塵一つとどめぬ淸淨な構へ、白砂を廻らした玄關の奧には、尼公のおでましを待つのでもあらう、白緒の小型なフェルトの草履が一足揃へてあつた。

法隆寺の橫手からバスに乘り、せみの小川を渡つて郡山へと急ぎ、そこから電車で西大寺に行く。數日前ここに光明眞言會といふこの寺に名高い法會が勤まり、寶珠院のお住持もその法席に

列したといふことを昨日聞いたので、急に訪ねて見る氣にはなつたのである。修法の行はれた大金堂も今は鎖され、格子の隙より中を覗けば、名殘の圓座そのままに、ありし修法の莊嚴さを物語つてゐる。堂內から漏れ來る空氣も思ひなしか、まだ消えやらぬ名香の香を傳へるのである。本坊に行つて刺を通じ、寶珠院師の話をして、ここの祕佛愛染明王と中興開山興正菩薩叡尊上人の御像を拜みたいと申し出たところ、寺僧は快く私を愛染堂に案內してくれた。私は寺內の車井戸の水を汲んで、口そそぎ手を淸め、いづこともなく名香の薰き込められたる黑光りする薄暗き大道場に導かれ、先づ側壇の興正菩薩の像に燒香した。戶帳をかかげて拜すれば、眼光かがやいて生けるがごときその聖容、末法濁亂の嵐の中に戒律復興の大旆を高くかざして一世を睥睨したその偉風、今目の前に私を威壓してゐる。佛日ともすれば薄れんとする今日、一人の叡尊あるあらばと痛歎せざるを得ない。

次いで案內の僧は正面の宮殿の扉を開いた。中には錦帳深く垂れ、その帳をかかげれば更にその奧に一重の厨子がある。その朱塗の厨子の戶を開けば、火と燃ゆる愛染明王の降魔の尊像、神威赫々として眼もくらむばかり。ああ、この靈像こそは弘安の昔、蒙古襲來のその砌、かしこくも龜山上皇の令旨を奉じて、南都の聖者西大寺叡尊が敵國降伏の祈願を籠めた本尊であつて、叡尊自ら感得して彫刻した靈像とのことである。像そのものが尊いばかりでなく、偉大なる精神力、信力によつて造られ、國難克服の大念力、大願力に燃えて叡尊の祈願した像であると思ふと、更

に尊く拜まれるのである。その像は大信念、大願力の結晶なるが故に、靈驗を顯はすのである。ひとり愛染明王に限つたわけのものではない。叡尊は愛染明王を感得したる故に愛染明王に祈つたのである。役行者は藏王權現を感得したるが故に藏王權現を以て降魔の尊像とした。不動明王でも毘沙門天王でもよろしい。それぞれ有緣の諸尊に對つて大信力を集中すれば、功德のあるのが當り前である。

薪の酬恩庵

奈良電を新田邊で下りて里餘、薪の酬恩庵に行く。ここは一休禪師の隱栖の地、通稱一休寺である。山城平野を見はるかす小高き丘に白塀を廻らした寺門一構、門を入つて半丁、右折すれば角に宮內省の制札尊き一休禪師の墓所がある。禪師は後小松天皇の皇子である。墓所の前を大方丈の屋根を見つつ白壁の土塀に添うて進み、右に石段を下れば突當りは大庫裡、右は玄關。すべて禪院の規矩に從つて布置整然、建物はさほど古くなく、概して紫野大德寺の本坊を模してそれを小型にしたといふべきもので、大方丈正面奥の佛壇には、一休禪師の木像が安置されてゐる。方丈の前と後は庭になり、栽込みも配石も疎らにして風致に富む。ここの住職の母堂であらう、老婦人が出て案內してくれた。かかる名刹も今は世襲となつてゐるのであらうか。

ここには一休の在世當時、連歌師の柴野宗長も來たことがあり、又慶長元和の交、澤庵和尙も

一時錫を止めたことがあつた。明治の排佛の時にはここにも嵐が吹きまくつたと見え、現在世間にある一休の墨蹟の中には、この酬恩庵から出たものが少くない。

雨の五山めぐり

翌十六日は京都の五山めぐり。先づ早朝雨を冒して相國寺に行き、塔頭のT院にK師を訪ねる。昨夜電話で面會を申込んで置いたにも拘らず、會つてくれぬ。五山の事について尋ねたいことがあるのだからと云つても、さういふ事は一向知らぬと云つてとりあはぬ。その癖K師は京都禪林で屈指の學者なのである。これが禪僧の頑迷さであると思ふと、こちらもそのまま引退られぬ。一寸立話でもいいからと云つたので、やつと庫裡の上り口まで出て來た。上れとは云はぬ。こちらも心得てゐるから玄關などから訪れるやうなことはしない。昔の僧錄司のあつた鹿苑院、蔭涼軒などのあつた位置を尋ねる。それは今同志社大學の敷地になつてゐるとのこと。また蔭涼軒日錄で名高い蔭涼軒は鹿苑院中の隱寮の名であることも解つた。これがその年の十一月、澤庵の放送をする時に役立たうとは思はなかつたが、澤庵と崇傳との抗爭を述べる時、僧錄司のことに言及し、僧錄司が金地院に置かれる以前には鹿苑院中の蔭涼軒にあつた事を云はねばならず、さうすると鹿苑院と蔭涼軒の關係が明らかになつてゐなければならなかつたのである。上り口の立話し、而も先方がいやだといふのを無理に引きとめての一問一答でもこれだけの收穫があつたのだ

から有難い。もつといろいろ尋ねたかつたが、病中で人との對談を斷るといふものを無理にといふ譯にもゆかないので、五山のことに明るい古老を紹介してくれと賴んだところ、山内G院のM師と東福寺塔頭J院のS師とに名刺を書いてくれた。そこで、それを持つてすぐ四五軒先きのG院にM師を訪ねる。これは頗る氣樂に會つてくれて、いろいろ山内の變遷などを話した。本山の重役だけあつて宗政上の話が主で學問方面のことには及ばなかつたが、ただここに所藏してゐた『翰林胡蘆集』がいつの間にか持ち去られてしまつて頗る殘念なことをしたといふやうなことであつた。案内されて方丈、書院等を一覽したが、さすがに堂々たるものである。

そこを辭して蹴上の南禪寺に行く。崇傳の開いた金地院は桃山建造物を移したもので、その結構莊麗本山をしのぐものがあるが、曾て一見したので、今日は割愛して天授院を訪ふ。ここは南禪開山大明國師の塔所で、大方丈正面の佛壇の奥には漆塗の扉固く鎖した密室があつて、國師の祕像が置かれてある。白地古金襴の水引戸帳に映えるここの方丈の莊嚴はまた何ともいへぬ落ちついた味で、ゆつくり鑑賞したかつたのであるが、心なき寺僧は、今忙しいからとばかり、こちらの問ひに多く答へず、むしろうるさいといふやうな表情なので、心ならずも辭し去つた。遙々と來た遠來の信仰と學問の順禮者をすげなくあしらふのが學問に理解のない禪僧の常ではあるが、さりとは情けなき振舞ひではなからうか。

西大寺叡尊と大明國師普門和尚とが、ここ南禪林寺の離宮に於いて妖怪調伏の祕法を競つた正

應の昔の物語も聞かまほしいのであるが、今はそれについて語る古老もこの山には居らぬのであらう。

天授院を出て本坊の北隣なる歸雲院を見る。ここは南禪の二祖規庵祖圓の道場で東山の翠微を庭にして幽邃極まりなき禪院である。この日はここの方丈で俳句の會が催されるらしく、折からの秋雨を冒して三々五々と俳人が集つて來る。方丈に通ずる玄關の扉も今日は開かれてゐるので、私もそつとそこから中に入つて、雨にけぶる庭と寂びた方丈の建物とを眺めた。ああ何たる靜けさぞ、わくら葉を傳ひ落ちる雨の雫の音も聞くべく、覆ひかかれる山の木立はしつとりと濡れて梢を低くしだらせてゐる。方丈の廣緣には句作の人々が物案じ顏にうつろな目を向けて佇んでゐる。ああ、この庭とこの建物、そしてそれらの人々、渾然として靜寂そのものである。

このまま、しばしここに止りたくは思つたが、そこのまとゐに入るべくもあらぬ我れ、やむなく踵をかへして門外に出る。

虎關國師と正徹和尚

それから、東福寺内J院にS師を訪れる。J院には辨財天が祀られ、一山の福德を獨占するかに見える。さればこそS師も一山の重役として又臨濟宗の要人として時めいてゐる。ここでも快く會つてくれて、私の無遠慮な問ひに對し、いやな顏もせず相槌をうつてくれた。その時聞いた

話に、御一新の排佛騒ぎの時、一番周章てたのは東福寺で、寺内に數多あつた名園を悉く壞してしまひ、塔頭は塔頭で目ぼしい建物、方丈、客殿などを賣拂つて庫裡だけ殘すといふ有様であつたといふ。當時としては笑へない話であるが、排佛の聲高き今日、以て他山の石とするに足るであらう。同師は先年、開山國師六百五十年大遠忌に『聖一國師年譜』『聖一國師語錄』等を上梓したが、今それを取り出して私に贈られたので、私は携へてゐた『澤庵和尙』の小冊子を呈して答禮とした。

辭して山內栗棘庵に立ち寄る。ここは東福寺四世白雲惠曉の道場で、輪番地として山內屈指の塔頭。門の見付きも立派であり、方丈もがつちりと大きいが、財的基礎が無いためか住僧とてもなく、內部はいたく荒廢し、俗人が一間を借りて住んでゐるといふ狀態である。ここの庭先に有名な正徹和尙の墓といふのがある。正徹はいはゆる徹書記で、東福寺の書記役を勤めてゐたといふのだから、僧としては微賤な地位に居つたわけだが、和歌連歌に於ける文學史上の功績に至つては偉大なものであつて、二世の東山湛照、四世の白雲惠曉の名は忘れられることがあつても正徹の名は日本の文學史と共に永久に忘れられぬであらう。正徹は諸國を流浪してその終るところが明らかでない。因つてこの墓も町の追慕者によつて建てられたもので、埋骨の場所ではないとのことである。

次いで海藏院に行く。ここは『元亨釋書』の著書として名高い虎關師錬の塔所で、今は宗門の

專門道場として雲水の修行場所となつてゐる。本堂中央の佛壇に虎關國師の木像を拜む。傳によれば國師は幼にして病弱、ために書筆に親しむといふことが見えてゐるが、この木像は容貌魁偉、まことに凜々たる偉風がある。ここには虎關の墓がある筈で、私が墓に詣でたいといつたので、僧堂の雲水さんがあちこち探してくれられたが、どうも見當らぬとのこと、永い年月の間にどうかなつてしまつたのだらう。まことに惜しい氣もするけれども、もとより無相を相とする國師のことであるから、墓の必要もないわけで、無い方がいつそさつぱりしてよいであらう。

考へて見ると、虎關のやうな歷史家が我が禪門から出たことは愉快である。江戸時代の師蠻と共に、禪門の誇る二大歷史家と云つてよいであらう。その虎關の大著は、その師寧一山の一言に起因するといはれる。虎關曾て一山に日本の僧の事蹟を問はれて答へ得ず、これに發奮して『元亨釋書』の著述を思ひ立つたとのこと、一山の一言なかりせば、『元亨釋書』は無かつたかも知れないのである。

妙喜世界と摩利支天

去つて建仁寺に行く。中巖圓月の妙喜世界の遺跡を訪ねたところ、山內の靈源院を敎へられ、雨中を若い僧に案內して貰ふ。靈源院は僧堂の横を突き當つた小さな寺で、寺といふよりは在家といふ造りである。果たせるかな、そこには俗人が住んでゐて、圓月の木像は四疊半の狹い一間

に押し込められ、僅かに茶湯が備へられてゐるに過ぎぬ。しかしその木像の、その相貌の立派なこと。東山の妙喜世界に端居して、その禪にその文にその學に一世を風靡した氣魄が眉宇の間に動いてゐる。虎關が加茂の濟北庵に幽居して、門を鎖し客を謝して專心著述に耽つてゐた時でも、木戸御免の殊遇をうけたのは圓月ではなかつたか。虎關にそれほどその才を愛された圓月は、後年『中正子』を著して一躍朱子學の泰斗となり、『東海一漚集』に於いてその文名を天下に馳せたのであつた。虎關にしても圓月にしても、その他五山の禪僧達にしても、皆禪門にありながら學藝の世界に名を成した人々である。然るにどうして後世の禪僧は、ひたすら學問に遠ざかり、學問を邪道の如く考へるのであるか。なるほど、五山の禪は學問で滅びたともいへよう。併し、その學問を捨てた今日の禪僧がどれだけ禪を今日に生かしてゐるか。私は中巖圓月を思ふたびに、今日の禪門に學問の必要を强調したく思ふのである。

ああ、妙喜世界！　中巖圓月は自己の丈室にさう名づけたが、その「妙喜世界」の扁額は六百年の歳月に黑ずんで、今この家の六疊の座敷の長押につまらなさうに掛つてゐる。尤もここにあるのは副本であつて、眞本は僧堂に揭げてあるとの事である。中巖圓月の墓も今は殘つてゐない。靈源院の庫裡の傍らの一本松がその塔所であるともいはれてゐるが、はつきりした事は解らない。

私は今日の禪僧の案外物質的なのに驚く。そして歷史を重んじないのを歎かはしく思ふ。中巖圓月の塔所なども史蹟を尊重する心があるならばすてて置くべきではない筈で、その像を安置す

るためにも、適當な設備をなすべきであるのに、どういふ理由か知らぬが、この文化史的意義の最も深い祖師の木像を粗末にして置くのは心外である。町の開けたために、檀家が增えたり、土地の價格が上つたりして裕福になる寺があるかと思ふと、一方かういふ歷史的意義を持ちつつ廢れて行く寺もある。「妙喜世界」の遺跡くらゐ、今時、何とでもして復興出來るであらうに、このままにして置くは實に惜しい。これはひとり「妙喜世界」の場合ばかりではなく、すべてかうした文化性、歷史性の豐かな寺はどしどし復興して行くべきで、これが日本文化史上に於ける禪宗の地位を顯彰する所以であると思ふ。

しかしまた考へやうによつては、中巖圓月の無縫塔は世界中に一ぱいだともいへるので、さう思へば敢へて松の木の根本を探すにも當るまい。

向ひ側の禪居庵に淸拙正澄の像と墓とを拜む。禪居庵は摩利支天を祀り、建仁寺中第一の賑やかな寺である。摩利支天は三面八臂の女神で、これを祈ると隱形（おんぎやう）、勝利を得られるといふので、古來武士の間に信仰された。像は一二寸にして猪に乘るのが普通の樣式になつてゐる。ここの像は淸拙正澄が支那から將來したもので、寺門繁興のために、先づこの建仁寺に祀り、南禪寺にも勸請した。

前にもいつたやうに、禪門には天部の諸尊を祀ることが盛んに行はれる。豐川の吒幾爾天（だきにてん）（豐川稻荷）、小田原最乘寺の道了權現、奧山方興寺の半僧坊權現等その他いくらもあるであらう。

支那の歸化僧清拙正澄の像は大鑑國師の勅諡に榮えて、この摩利支天堂の左側の壇に安置されてゐる。清拙は百丈の再來といはれた人で、清規を制定し、一時弛緩に傾いた禪林の規矩を嚴にすることに功があつた。禪居庵の客殿は海屋友松の襖繪に名高く、摩利支天堂は賽者の絶ゆることなく賑やかである。寺後にその墓がある。正澄の靈骨はここと南禪と建長と三箇所に分ち葬られてゐるが、墓所の明らかなのはここだけで、鎌倉建長寺には庵と摩利支天堂とはあるが、墓はない。

隱山派の法窟

その夜京都を立ち、途中岐阜に下車する。瑞龍寺に詣でんがためである。金寶山瑞龍禪寺は美濃町にあり、美濃の大守土岐頼成の開基にかかり、開山は妙心東海派の祖悟溪宗頓である。この寺は近世禪林の英傑にして隱山派の祖たる隱山惟琰の古道場として名高く、伊深の正眼寺僧堂と並んで美濃叢林の雙璧である。この叢林には隱山以來、棠林、雪潭、禪外等の巨匠相次いで輩出、法幢を建てて大いに宗風を擧揚した。美濃はまことに隱山派の法窟である。

總門を入れば、さまでの老松にはあらねど松の並木二丁に續きて、兩側の子院整然と立ち並び、山を負ひて殿堂參差、まことに鬱乎たる大叢林である。先づ目にうつるは、土岐家の紋所桔梗を散りばめたる書院の杉戸、それに續いて本堂、僧堂、甍を並べて建ち連なる。刺を通ずれば知客

寮に請ぜられる。寮頭は私の名を知つてゐて親切に諸堂を案内してくれる。本堂に於いて隱山大和尚の像に燒香し、次いで禪堂大徹堂を見る。堂後の壁に掲げたる新到の雲水名札の中に、私と同名の康安禪士といふを見出し、そぞろに珍らしさを覺えた。この僧堂は濃尾震災の直後、禪外門下の逸足、梅山玄秀老師の斡旋で隱山の古道場たる塔頭天澤僧堂を移したもので、思ひ出一しほ深きものがある。玄秀老師は後に臺北臨濟寺を開き、晩年、堺の南宗寺僧堂の師家となり、在職中に遷化した。私とは俗緣關係も薄からざるものがある。今度特にこの山に立寄つたのもさういふ因緣があつたからで、雨中を導かれて裏山の隱山大和尚、及び玄秀老師の師禪外大和尚の墓に詣でる。墓は三尺四方石の玉垣を以て圍むのみで、中には別にしるしの石も置いてない。變つた趣向である。山を下つて、更に一塔頭の墓地に棠林和尚の塔を拜む。棠林和尚は我が師の授業寺たる美濃郡上八幡の慈恩寺の出身で、怒鳴るので有名な雷雪潭の師である。雷雪潭を打出した棠林和尚は、恐らく地震のごとき驚天動地の活作略を弄した大宗匠であつたでもあらう。私は靜かにその墓所に燒香羅拜して宿緣の甚重を心に感謝したのであつた。

水郷一日一夜

晩涼月明のドライブ

蘆花の『自然と人生』の中に利根川の秋暁を寫した文がある。私は少年の頃それを讀んで、一度利根川に遊んで見たいと思つたが、今日まで遂にその機會を有たなかつた。曾て土浦から霞ケ浦を經て鹿島神社に詣で、潮來出島の十二橋を通つて佐原に上つたことがあつたが、それは蘆花の文にある場所とは異つてゐたので、利根川畔の息栖は依然として私の憧れの地であつた。しかるに去る八月十五日（昭和十二年）私は思ひがけなく、この久しい戀の利根川畔に遊ぶことが出來た。

日ごろ懇意の間柄である品川丹毒病院長加藤清一氏は鹿島に廣い土地を所有し、松林の間に閑居を營み、農園の經營や盆栽の仕立を令息夫妻に任せて、時折その實績を見がてら、ここに休養のドライブを試みるを常としてゐるのであるが、今度その鹿島行に誘はれ同行することになつた。晩涼月明に乘じて九十哩、四時間のドライブは面白い。

夜目にも著るき水郷

十四日の午後七時、院長の自家用自動車、流線型ナツシュは加藤院長とその令孃と筆者とを載せて、運轉手君のアクセル一踏み、ゆるやかに品川の丹毒病院をすべり出した。ネオンの大東京を南西から北東へ通りぬけて、江戸川の葛飾橋を渡ると、もうそこは千葉縣だ。急に空氣の清さ、風の涼しさを覺える。松戸、馬橋、柏、我孫子と夜の町村を疾驅して茨城縣の取手に出て、そこで長い利根川の鐵橋を渡る。川かぜ車窓をうつて何ともいへぬ快味だ。

それから藤代、龍ケ崎、江戸崎、阿波の坂を越えるといよいよ水郷だ。あたりは暗く、月はあれども影薄くしてはつきりとは見えわかず、水と田と交錯參差はてしなくつづくのが、おぼろながら夜目にもそれと知られるのである。障碍物から全く解放されたわれらが自動車は天馬空を行くがごとくに飛ぶ。高級車のありがたさ、動搖は殆んど感じない。

牛堀を過ぎると潮來の町、細長い町筋を走り過ぎるとほどなく北浦で、長蛇の如き神宮橋が白く光る水の上に延びてゐる。渡り切るとそこは鹿島町、武の神、建甕槌命を齋き祀れる宮どころである。この地方は藤原氏の遠祖大鹿島命によつて開拓された土地とのこと、鎌足の神社も近くにある。

町を出はづれると、そのあたりは一面小松の密生した廣漠たる原野ださうで、夜目にはしかと

解らぬが、自動車はいつしか松林の間を縫つて沙地を走つてゐる。松林の間の沙の小路を幾度か折れ曲つて奥深い一構の中に入ると、そこが加藤氏の別荘で、一行は先著の加藤夫人及び、そこに永住する令息夫妻に迎へられて車を下りる。正に十一時、四時間の遠乘りであつたが少しも疲れを感じない。思へば極樂の旅である。

樂しい旅にも一喜一憂

この樂な愉快な自動車の旅にも一種の喜怒哀樂悲喜哀歡が伴ふから面白い。市内を走る時にはゴー・ストップの信號に一喜一憂する。赤の出ぬ内うまく走りぬけるとたまらなく嬉しいが、差しかかつた矢先きにパッと赤に出られるとうんざりする。鐵道踏切の遮斷機の開閉が自動車に乘つてゐると一苦勞である。走つてゐる身にとつては停るほど辛い事はない。走るのを原則としてゐると一秒でも無意味に停車したくない。前に行く自動車にも、すれ違ふ自動車にも無關心ではをられぬ。自分の自動車のコンディションをよりよくすることにのみ專念する。排他的氣分に支配され、競爭心が旺盛になつて、前の自動車を見ると追ひ越したくなる。追ひ越した時にはむやみにうれしいが、追ひ拔かれた時にはひどく腹が立つ。鋪裝してない田舍道になると、前に走られる事が最大の苦痛だ。前の車のあげた沙塵をそのままかぶらねばならぬからである。我が自動車のあげる沙塵のことなどはこの場合全く念頭にない。

他の自動車の後からゆくことは、何としても我慢ならない。自動車の通つた後といふものは、相當の時を經過しない限り、田舍道などは沙塵でとても不愉快である。すれ違ふ時も同じ事で、それがバスか、トラックか、乘用車か、そのいづれかによつて蒙る沙塵の程度に差があるので、その都度氣がもめて、窓を閉めたり開けたり、いや大抵なことではない。しかしそれもほんの一時で、過ぎればすぐに忘れてしまふのである。

人生に於ける悲觀樂觀、成敗利鈍、是非曲直も詮じつめればこんなもので、自動車内の一瞬一時の悲喜哀歡と大した變りはないであらう。また樂しいドライブにも人生が縮圖されてゐると思ふと面白い。

名に負ふ坂東太郎

八月十五日の朝、雞の聲に目を醒したのは五時半頃である。蚊帳を出て緣に立つと、曉氣さわやかに氣持がよい。庭越しに見えるは神の池と稱する大池で、湖水とも海とも見まがふほどの廣い眺めである。庭は一面の沙原で、熊手のあと鮮かに打水されてしつとりと濕つてゐる。庭に下れば、無數に所せく置かれてある松の盆栽は水をふくんで綠一しほ美しく、中には數十年の星霜を經た枝ぶり面白きもあまたあり、京都の金閣寺の名松「陸舟」に似て帆かけ舟式の松もあり、園主の趣味もしのばれてゆかしい。朝露をふんで池の方に行つて見る。池邊に立てば、鹿島灘に

のぼつた太陽は池を越して遠くつづく沙丘の上に姿をあらはし、四邊はただ見る小松の林で、人煙稀れなる大自然の姿である。

朝食後、ここの若主人の案内で一行うちつれ自動車で大利根川にゆく。息栖神社の横で下りて社前に額づく。神苑は老樹鬱蒼、社殿は物古りて神々しい。正面の大鳥居を出るとそこは名に負ふ坂東太郎、大利根の河畔である。

ああ、少年の日、蘆花の筆に印象づけられて、永年、幻に描いてゐたのは實にここであつたのだ。

餌と間違へて釣針を呑む

『自然と人生』は書いてゐる。

去年の秋十一月の初旬、利根川の左岸息栖といふ所へ泊つた。此處は利根の本流が北利根北浦の末流と落合ふところで、川幅がひろく、對岸小見川までは小一里もあらう。宿は直ぐ水邊にあつて、夜半に眼を醒ますと、櫓の音が軋々枕頭に聞える。黎明に起きて、宿の者はまだ寢てゐるので、そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。まだほの闇い。空も河面も茫として鉛色であつた。直ぐ裏の方の闇い小屋の中で雞が勇ましく曉を告げると、餘程經て、川向ふの小見川の方から、さも微かな雞の音が聞えた。

大河を隔てて呼びかはす此雞聲は實によい。

その息栖だ。その大利根だ。私の心はをどらざるを得ない。一行は小舟で中流に出た。漁童、櫓を操つて流れを溯ること小半時、眞薦の蔭に舟を寄せると、そこに既に一艘の舟ありて一漁父がわれらを待つてゐた。釣の用意はすでに整つて、舟の近くには投げ餌にさそはれて來たイナやボラが魚紋を描いてゐる。イナやボラ釣の釣針には餌はつけない。餌まがひのものがついてゐる。投げ餌に誘はれて寄つて來た魚は、餌と間違へて釣針を呑んで釣上げられるのである。淺ましいやうだが、意味深い暗示を持つてゐる。

群がり寄つてゐる魚の大集團の中に釣糸を垂れるのであるから釣れない筈はないのだが、素人にはなかなか釣れないらしい。ここにも意味深い教訓がある。天下の丹毒患者を殆んど一手に引きうけて治療してゐるこの名國手も釣竿とつてはいかにせん、四時間ほどかかつて僅かに十尾、而もその大半は漁父の竿にかかつたものであつた。私はただ傍觀し、水上を渡る涼風を賞してゐたのみである。

正午別莊に歸つて風呂を浴び、鑵詰本位の心づくしに腹をこしらへ、横になつてしばし午睡の快を貪つてから、また西瓜や桃や素麺やら、立てつづけに胃の腑に送つたが、間違つてもお醫者がゐるからと安心して悉く平らげた。

かくして一日一夜の清遊を終つてその日の夕方六時に出發、歸りの自動車には院長夫人と女中

さんとが加はり、總勢五人、賑々しく往きに見られなかつた水郷の景色を賞しつつ、昨夜の路を逆に走つて夜の十時無事に品川に着いた。

第四篇

庵・門・庭・墓

庵

世にすてられて顧られることのなかつたわが禪庵が、近ごろいかなる因緣か人に知られて、未知の人の訪問をうけることが多くなつた。その數ある人のうちに西村文則氏がある、西村氏は水戸の人、號を琴村と稱し、水戸學の權威にして、趣味の文人である。私は去る年の七月この老文學者の來訪をうけた。するとその翌月『東洋趣味』八月號に「趣味の巡禮」と題し、西村氏の春雨庵訪問記が載つた。その記事の中で特に禪庵の門と庭のことに言及してあつたので、私は先づ「門」といふ一文を草して『東洋趣味』に寄せ、次いでまた「庭」といふ一文を寄稿した。今、彼我の文を併せ掲げて趣味のすさびとする。

初めの「春雨庵訪問記」は西村氏の文、後の二篇は筆者の文である。

春雨庵訪問記

琴村

京濱バスを北品川二丁目で降りる。そこに品川區役所と三菱銀行支店が對角線的にあり、昔の品川宿には全くふさはしからぬ現代色だ。そこを西に向つて歩めば坦々たるアスファルト、その兩側一帶が東海寺の舊境内だ。左側に長い長い石の塀、その折れまがるところに東海禪寺の大石標がある。つき當つたところが寺門だ。この一歩手まへにきれいな自動車小屋がある。周圍の景觀にそぐはぬ存在だと思つた。澤庵和尚を地下に起し、これを一目みせてやりたいやうな心地もする。

玄關に立つて「御免」といふ。すぐものの響きに應ずるがやう「どうれ」の聲。むかしなつかしい答へだ。そして法衣の袖をうしろにたくしあげた若い納所が顔を出す。「××さんは」ときく。「その人なら、このさきの春雨庵」だといふ。

今日の巡禮、實はこの春雨庵がめあてなのである。然るにそれを東海寺中の一小庵位に考へたのが私の思ひちがひだ。先づ教つたとほり、省線電車のガード一つ越す。そしてそのあたりを眺めてみる。二十年前、三十年前の面影は殆んど殘つてゐない。やれ日本ペイントだの、やれ三共製藥だの、内燃機會社だのの大小工場の大煙突が沖天し、あの清洌そのもののやうな目黒川に、

もと通り船は動いても、異臭をはなつ汚濁水がまつくろになつて流れてゐる。小さなすずかけの木二本生えた人家の横をつきあたると、そこが春雨庵の門だ。庵に門はをかしいが、事實門だから致し方がない。門も門、玉石角石をセメントで固めて積み上げた門だ。瓦全か玉碎かの意味にもとれる。おそらくこれは柴門とかしをり戸とかいふものの、變形現代化であらう。私はこの字體の定かならぬ門標の通用門からはひつて、玄關に立つ。はなやかな、又なまめかしい女下駄が五六足並べてある。考へてみれば今日はお盆の十二日である。お寺さんのかき入れどきだと失禮なことまで胸にうかぶ。不用意に訪ねて來た無考へをむしろ恥しく思つた。女下駄の行列は卽ちお盆を意味するのだ。刺を通ずると、書肆象文閣主から話してあると見え應接間へ通される。全然西洋式の一間だ。しかし庵主××××さんのモダン僧侶たるをきいてゐるだけ少しも愕かずに待つてると、若い奥さんが果物の鉢を捧げて來て、いとも淑やかに、中元參詣者のをることを告げて去る。ふと見ると、書架の一端に京燒の小花瓶に投げ入れた山百合の花が咲きかけてをる。その傍らに水瓶めく古雅な水注。又棚間に見る「雲門關」の小額、これと相對して一軸がある。それには白衣行者とやらの春雨庵讃の一首。庵室は庵室だがいかにも均整のととのつた部屋構へ、庵主の人となりが窺はれる、と思つた時だ。本堂のはうから讀經の聲があがる。それが靜寂なつゆばれの僧院のなかだ。時々木魚の音と鐘にしみ入るやうな鉦の音が混じて、何ともいひやうなき心境になる。私はしきりに瞑想にふけつた。そして三百年近い古に思ひを馳せつつ、ここにこ

の庵室をむすんで澤庵和尚が安居された時を聯想し、廊下や客殿の、一本一本の柱、天井の板にまで注意深い眼をやつた。すでに相當に補修もし、又現代化してはゐるが、こぶだらけの長押や、時代にとりのこされた柱などを見ると、在りし日の和尚の簡素生活がどことなくしのばれる。

やがて讀經の聲がぴたりやむ。鉦の音も木魚の音もやんだ。小さな足どりで女客五六人辭し去るけはひがすると同時に、有髪の僧であり、春雨庵の現住であり、又早大教授である××師が墨染の衣で現れて、「どうもお待たせいたしました」といつて、私を客殿の方へ案内した。そして楣間の「春雨」の二字につき語るところによると、これが澤庵の眞筆だ。まことに豪宕な筆力、枯淡な草書、みるからに澤庵その人の氣韻が全庵を壓し去るやうな勢ひだ。高齢九十に垂んとする益田孝翁は、この模造を拵へ、自己の茶室に掲げるべく、ついこのあひだ、人を派してこの原圖を寫して行つたとやら。

××師は又楣間の、「夢」と題し「百年三萬六千日、彌勒觀音幾是非。是亦夢、非亦夢」云々と附記せる小額を指し、「これが和尚臨終の一筆だが文字の雄勁さ、やがて死ぬ人の筆とは思はれぬほどの立派さですが、この眞本は現に東海寺にあります」と說く。更に古びた柱かけに刻める文字を見ると、

當庵開祖澤庵和尚示寂正保二乙酉年十二月十一日今至干昭和十二年既得二百九十五年。先是寛永七庚午年和尚法算五十八扁羽山謫居草廬而曰春雨。延寶元癸丑大檀越土岐氏頼行源公移

羽山春雨庵於萬松崦西。

とある。それが春雨庵由來記とのこと。

辭して歸らうとすると、師は特に別棟の土藏樣なる靈屋に私を導いた。まことに光線のにぶい、香煙の煤にくすんだ薄暗いその中には間口三間の佛壇を設け、百餘の大型大名位牌がならび、佛具も裝備も目もあやに金色燦爛として莊嚴そのもののやうな光景だ。師のいふところによると、これは土岐氏の靈屋で、澤庵和尚が法度事件で羽州上ノ山に配流になつた時、領主土岐氏に預けられた。時の領主頼行公は深く和尚に歸依し、春雨庵を營んでこれに住はせたが、後年これを江戸に移し、東海寺の塔頭に加へ、それ以來代々春雨庵の大檀那となつて今日に及んでゐるとの事、柱かけの文字はそれを說明するものである。

も一つ春雨庵につき特記すべきは、由緒あるその庭園であらう。すなはち、門から玄關迄の間、約五十坪ほどのところに、松、楓、かなめ、もち、竹いろいろ樹木の配合よろしき植込みに、ヒマラヤ杉まで加へて一寸近代がかつた庭がまへ、そしてところどころに石を据ゑた風情、又自然の傾斜を生かして曲折させた趣向、すべて庵を中心に茶の湯趣味の造庭術ではあるが、少くもそれには茶味ばかりでなく、禪味もとり入れた精神がほの見える。閑寂、幽邃、簡素の文字が丁度この庭のために作られたかのやうだ。寒山詩に「出家は清閑を要す」とあるが、この境地たしかに清閑の二字につきる。

私は××師の心をこめた抹茶一碗を喫して辭す。そして更に澤庵和尚の墓と加茂眞淵の墓に向つた。

門

門――といつても、漱石の小説ではない。わが禪庵の門のことである。『東洋趣味』八月號の「趣味の巡禮」と題する琴村居士の春雨庵訪問記は、自分の寫眞を見るやうな氣がしてうれしくもあり恥かしくもあつたが、その中にわが禪庵の石の門のことが出てゐたのは特に私の胸を打つた。禪庵と石の門との不調和はたれよりも私自身が苦に病んでゐることなので、痛いところに觸られた氣がしたのである。「庵」とあるからには、いはるる通り柴門か枝折戸でなければ平仄があはない。いや、全く門や垣は設けずして軒端から天地に素通りのできるやうでなくては本格でない。しかるにわが庵たるや、靜かに住みなした草の庵とことかはつて、すこぶる俗氣芬々たるものなのである。玄關に女下駄はまだおろか、時としてはハイ・ヒールだ。だからといつて石の門でよいといふ結論にはならない。實をいふと私は石の門が大きらひなのである。門について私は相當趣味をもつてゐる。私は門を見てあるくのが好きだ。東京ならば山の手の屋敷町、京都ならば南禪寺から岡崎へかけて高級住宅地あたりを歩くと、いたるところに木造の大きからぬ風雅なよい門を見出す。お寺の門で心をひかれるのは、鹿ケ谷の法然院の門である。これはいはゆる

お寺の山門とことかはつたささやかにして古雅なものである。門には屋根がなくては落ちつかぬ。屋根は檜皮を最とし、茅を次とし、瓦を第三とする。茅と瓦の混葺（まぜぶき）も趣味なしとしない。材は檜か檜であらう。柱と扉の同材は本格だが變り扉も面白い。竹扉も瀟洒でよい。軒は深くありたい。しかし棟はあまりそらせたくない。扁額をかかげるは門の恰好による。やたらにかけるのは考へものだ。聯はあまり好ましくない。四足は古風で物々しい。三門、唐門、勅使門、京都へ行けば好きな門が見られる。鎌倉のお寺も門だけはすばらしい。

今年の三月花のころ、立川の普濟寺に花見がてらの趣味の巡禮をやつた。普濟寺は建長派の臨濟宗で、物外和尚と國寶の六面塔に名高い關東の名刹で、境致もよく、伽藍も立派で山門もあるが、寺の入口の處に石柱が二本惣門といふ形で立つてゐたのには興味索然たるを覺えた。

また去る七月の下旬、私は埼玉縣の鳩ケ谷に住む若い友の案内で蕨の在に名刹長得禪寺を訪ねた。寺は山の中腹にあり、山門、唐門、方丈（本堂）等、層々參差とたちならび、鬱然たる一大叢林を成してゐるが、ここでも惣門は石の門だ。私はやはり不調和を感じた。

これほど石の門に對して神經質になつてゐる私が、なにゆゑにわが禪庵にあらずもがなの石の門をしつらへたかといふに、蓋しやむを得ざるに出でたのである。

私は七年前に禪庵の修繕改造を行つた。不德の悲しさは、どこから寄附を受けるあてもなく、また寄附を集めるやうな腕のない私であるから、全部自力でやらねばならなかつた。ところで、

どう豫算をたてて見ても、門までつくる餘裕はなく、だからといつて庵だけ繕つて門なしでゐるわけにも行かない。思案してゐる時に、働きに來てゐた石工が亂積の石の門をやらしてくれと申し出た。なるほど古い墓石の不用なのがいくらもあり、使ひどころのない玉石も澤山ある。玉石と角石をコミで亂積にしたら一寸面白いものが出來るかもしれない。文化住宅にある大谷石の角切亂積はぞつとしないが、丸い石と四角い石とを雜駁にまぜて積みあげ、文字通り亂積の門柱とし、そこに調和統一を見出すといふことは圓融無礙の佛理にも適つて面白い。第一、廢物利用は何よりも經濟的でよい、といふわけで出來上つたのが、あの石の門である。ただ扉だけは木にしたいと思つて日本橋の篠田にいひつけた。

だから私は、この石の門に滿足してはゐない。門標を掲げないのは他に理由もあるが、一つはこの門を暫定的なものと思つてゐるからである。私は將來志を得たならば、禪庵にふさはしいささやかな屋根のある木の門を別につくりたいと思つてゐる。場所も既に豫定してある。その時こそ、その門に榜して「澤庵和尚舊廬云々」と記さうと思ふ。それまでは心ならずも石の門で我慢する。

庭

私は庭に趣味を持つ。庭に對する私の趣味は、我が師甲鳥園先生に負ふ所が多い。甲鳥園は、

五十嵐力博士の邸宅の庭で、巣鴨に在るのでさう名づけられたのである。その甲鳥園に出入すること二十餘年の間に、おのづと養はれたのが庭に對する私の趣味である。

甲鳥園は大和讀みにしてかもぞのともいふ。樹々のたたずまひ、落ち水の音、から濱に水のいささか流れたる、石の燈籠のここかしこ木の間に見えかくれするなど、すべておもむき深く造りなした名園である。

この名園を二十餘年見馴れた目で、私は我が草庵の庭を營んだ。無論、甲鳥園の足もとにも及ばぬものが出來上つたが、とにかく庭らしい形を備へ得たのは甲鳥園の賜である。

わが草庵の前には目黑川が流れてゐる。この河が八年前に改修されて川幅が八間に擴がつた。そのために庵の地所が斜めに割かれ、三角形の具合のわるい地面が殘された。この三角形の地面に庭をつくるには、少なからぬ苦心があつた。

私は先づ庵を圍むに樹を以てする方針を立て、庵を中心に半圓形を劃し、（稍ゝ不正確ではあるが）その圓周に沿うて樹を植ゑ連ね、中央を空豁にした。鬱蒼たる感じと、豁然たる氣分とを併せ味はひたいが爲である。建物に樹を配する事も必要なので、本堂の前には向拜を挿んで二株の松樹を栽ゑ、玄關側にも一株の松を植ゑた。栽うるに松を選んだのは臨濟の栽松に因み、三株を限つたのは三尊佛に象つたのである。また建物と建物との直角に交はる隅の處には大きな八つ手と二本の梧桐を植ゑた。また庭の中心には眼睛の意味で樹が欲しい。そこに私は地盛りをして

我が庭の主である昔ながらの老松の枝ぶり面白きを移植した。それに從屬させて門からの見通しを避ける爲にヒマラヤ杉と、木槿と、木犀と、寒椿とを栽ゑた。五大尊に象つたともいへよう。それらの三佛五尊を遠卷きにして、綠の幔幕を張らうといふのが大體のプランであつた。

私は半圓形の彎込みをつくるに當つて、先づ在來の樹木を活かすことに苦心した。先代の頃に、煤煙除けに植ゑた樫の大木が現在疎らに殘つてゐる。それを柱にして、その間を縫つて、檜や、榧や、椎や、杉や、梧桐や、竹などを手當り次第に植ゑた。そしてそれらを最後列として、その前列には、稍ゝ高級のもち、木斛、つげ、ひば、かなめ、百日紅等を植ゑ並べ、下くさに八つ手、青木、きやら、躑躅、どうだん等を、所せく栽ゑ込み、最前列に若木の紅葉をあしらつて三段構へとした。そして懷を廣くして通風をよくし、冬枯の寂しさを少くするために、常磐木を主とすることにした。それらの樹の中には、目黑、奥澤、碑衾あたりから、新たに入れたのもあり、街頭の植木屋から買つて來たのもあり、裏の山から手をかけて運びおろしたのもあり、昔の庭の殘木もある。三株の松は遠く相州厚木の在から運ばれたものである。

爾來星霜七年、園主は蒼態依然としていささかの進歩も示さないが、樹木は年々に伸びて今は鬱蒼たる綠の庭となつた。綠の幕はいつしか完成されてゐた。それは園主の功ではなくして造化自然の大功といはねばならない。七年の風霜は、更にこの庭に若干の寂びまで添へて、始めて訪れられた琴村居士をして澤庵和尚以來の由緒ある庭と思はしむるに至つたのである。

澤庵和尚は庭造りにも妙を得てゐたと見えて、その考案に成つたと稱せられる庭が數十箇所現存してゐる。山形縣上ノ山の公園は土岐氏の城址であるが、その一隅に澤庵設計の庭といふのが殘つてゐる。又、但馬の出石町宗鏡寺にも澤庵の造つた庭があり、その塔頭にも和尚の掘つた心字の池といふのがある。これらは、私の實地に見たものであるが、この外にもまだどこかにあるかも知れぬ。が、我が禪庵の庭は前述の通りで、和尚には何等關係がないのである。若しこれを琴村居士の想像通り、和尚以來の由緒ある庭といふことにして置いたらどうであらう。それでも通るかもしれない。世の中には、さういふ風にして通してゐるのが多いのだから。

それはともかくとして、琴村居士が、この庭を評するに「清閑」の一語を以てせられたのはうれしい。清閑園——、私は、見るに足らざるこの無名の庭に、新たに清閑園の名を與へて、琴村居士の知己に酬いようと思ふ。

墓

わが禪庵は今は工場地帶の眞中にあつて唯一の綠地をなしてをりますが、私の子供の頃は、現今改修されて運河のやうになつてゐる目黑川が兩岸の綠の草の間に河身をあらはした清い流れで、その向うには一面の田圃が廣がり、その田を越えた遠い彼方には淺間臺の丘陵が連なり、その上に富士がぽつかり顏を出してゐました。夏は庭に螢が舞ひ込み、綠側から向うの丘の狐火が見え

ました。今住宅地になつてゐる御殿山は櫻の名所で、花時には華簪張りの茶見世が出來、居合抜きがあつたり、手踊りがあつたりして、目覺した花見客で賑はひました。もつともその頃から工場は多く、東隣には明治初年に建てられた煉瓦造りの硝子工場があり、その後幾變遷はしたものの煉瓦造りの宏壯な建物は今に殘り、外人技師の設計とかで大震災にもビクともせず、今では我國の煉瓦建築の中でも古いものに屬するでせう。また西隣には山手線を隔てて白煉瓦の製造所があり、一時なかなか隆盛でしたが今は全く跡方もなくなり、その工場に勤めてゐた多くの人達も、疾くに分散し、たいていはもう故人になつてゐます。河向うの原には明治の中頃に東京市電氣局の發電所が建ち、二百尺とかの太い煙突が二本天を摩して突き立つてゐましたが、震災後これも全く取壞はされ、今はその跡が三共製藥といふ藥工場になつてゐます。禪庵をめぐる僅かの地帶にも一種の桑海の變が見られるのです。

ただ比較的變らぬのは澤庵和尙の塔所（おはか）のある裏山の墓地です。こことても私が物心ついてから、二度鐵道の要地に取られて地域が縮小しましたが、それでも現在約二千坪の墓地があります。ここは澤庵山と呼ばれ、澤庵和尙の墓の外に、賀茂眞淵の墓、服部南郭の墓などの史蹟もあり、本居内遠の奥都伎もあり、農商務省三浦技師の殉職碑もあります。眞淵は南郭と親交があつたので、南郭が死んで東海寺の塔頭の少林院に葬られたその緣故で、眞淵も少林院に埋葬されたのです。現在の眞淵の墓は明治十六年に改修したもので、名所圖繪に出てゐる眞淵の墓とは位置が違ひま

す。ただ昔をしのぶに足るものは千蔭の碑であります。

私の子供のころ、この墓地に三基の板碑があり、今もその臺石が殘つてゐますが、板碑は三基ながら、いづれの好事家の仕業にや、何時の間にか、いづこともなく持ち去られてしまひました。

この墓山には樹木多く樫や椎が鬱蒼と茂り、間々楓の木が交つてゐます。私は好んでこの墓地を歩きますが、歩く度ごとにここに眠れる人々の冥福を祈らずに居られません。

殊に禪庵に生ひ立つた私にとつて感慨に堪へないのは、私が子供のころから知つてゐた多くの人々が今はこの墓地に石碑となつてゐる事です。殊に最近數年間に私は少なからぬ人々をここに葬りました。子孫の榮えてゐる家、衰へた家、盆暮に香華の絶えぬ墓、絶えて弔ふ人なき墓、人の幸不幸は死後にもあることが痛感されます。

私はこの墓地を歩いて、生前に知つてゐた人々の墓の前に立つと、その人の姿がありありと目に浮んで來るのです。

みんな墓になつてしまつた。——私はそんな感をよくさせられます。私の見知りごしの人々があまりに多くこの墓地の下に眠つてゐるからです。私は兩親を亡くして以來ことにその感が深いのです。

禪庵に生ひ立つた私は、これらの墓と共に多くの年月を過ぎて來ました。これらの墓の一つ一つが他人の墓でなく、我が墓のごとき感があるのであります。

今その墓についての思ひ出を取り出して書いて見ることにしませう。

おけいさん

おけいさんは船長さんの奥さんであつた。船長さんのT氏は、日露戰爭が終ると間もなく胸を病んで亡くなり、おけいさんは三十八で後家になつた。品川の表通りにあつた門構への家をたたんで横丁に小さな家を一軒借りて移つた。おけいさんには子供がなかつたので、後家になつてからのおけいさんは、書生を置いて世話をして、元氣な若い人達を相手に暮らすことにした。別に生活のためといふわけではなく、一つにはさびしさをまぎらすためもあつたらうが、一つには世話好きなその氣性がさうさせたのであらう。T家はわが禪庵の檀徒で、その墓はこの墓地にある。數ある墓のうちでも、T家の墓は大きく立派な方で、三坪ほどを占めて石の柵をめぐらしてある。そこにはT氏の兩親がすでに埋つてゐて、その同じ穴にT氏は土葬された。墓碑には四つの法名が刻まれ、その一つは赤い信女でおけいさんのであつた。

おけいさんは亡夫の命日にはかかさず墓にお詣りに來た。信心深い人でお墓ばかりでなく、必ず本堂に上つて位牌のまへに燒香して、その俗名を口に唱へながら永いこと拜むのを常とした。おけいさんは色の白い髪の黑い、目に愛敬のあるきれいな人である。人の顏を見れば先づ笑つてかかるといふ陽氣な質で、從つて話ずきで、忙しい忙しいと云ひながらおしやべりして行くといふ風である。よく大聲で笑つたが、その笑ひ聲に特色があつて、いかにもお可笑しいやうに聞え

るのである。

お盆には必ず十二日に燈籠をたてに來た。その燈籠といふのは、その頃あつた瓦斯燈のやうな形をしたブリキ製の硝子張りのもので中に石油ランプが入れてある。これを毎年お盆には持つて來て、先づ墓の前に丸太の柱を建て、その瓦斯燈のやうな燈籠を取りつけて行つた。そして夕方になると忘れずに燈火をともしに來る。お盆が濟むとまたそれをさつさと取片づけて行く。

おけいさんはいはゆる信心家で、亡夫思ひの貞女で、ほとけを大切にした。家には立派な佛壇を飾つて、命日には禪庵から必ずお經を上げに行つたものである。おけいさんの家にはいつも若い書生が二三人ゐた。おけいさんはそれらの書生を自分の子供のやうによく世話をしたので書生たちもおけいさんをお母さんのやうに思つてゐたし、おけいさんもまた欲得はなれて、しばしば自腹を切つてまでこれらの人々の面倒を見た。夫の船長さんの殘した遺產もそのため殆んどなくしてしまひ、おけいさんもだんだん年をとつて行つた。書生たちもそれぞれ學校を出て獨立して、世の中に出て行つた。老いて子もなく、頼るべき親戚もないおけいさんは、自分の家に置いた法律書生で辯護士になつたNに引きとられることになつた。

Nの家族の一人としてその妻君や子供等からお祖母さんと親しまれ勞はられつつ、なに不自由なく暮らしてゐる中に年月が經ち、夫に別れて三十年ほどして、おけいさんはふと病氣になつた。糖尿病といふことで養生したがはかばかしくなく、たうとう六十四歳ではかなくなつて禪庵の亡

夫の墓の中に葬られた。亡き後の弔ひ供養萬端を辯護士のN氏がとり行つたことはいふまでもない。それから數年が經過したころ、N氏の妻君が病氣になり四人の子を殘して亡くなり、別に檀那寺とてなかつたので禪庵で葬式を營み、とりあへず、おけいさんの墓の圍ひ中に葬ることにした。間もなく、N氏に二度目の奥さんが來た。その中にどういふ話からかN氏は先妻の石碑をおけいさんの塋域に建てることになつたが、いよいよ石碑を据付ける段になると、どうであらう、おけいさん夫婦のT家の石碑は横によせられ、そのあとにN家の墓碑をたてたものである。その石碑の下はからうとになつてゐてN夫人の遺骨が藏められ、更にその下の地の底には船長のTさんとその兩親が土葬されてをり、火葬されたおけいさんの遺骨はT家の墓と共に横に移されてしまつた。船長さん父子の埋つてゐる上にはT家の墓はなくてN家の新しい墓が立ち、T家の墓の下には、石碑に四つの法名が刻まれてゐるにも拘らず、またあれほど亡夫を慕つてゐたにも拘らず、おけいさん一人がさびしく眠ることになつた。おけいさん、どんな氣持で眠つてゐるだらう。

おつるさん

おつるさんは七十いくつといふに似合はず元氣なお婆さんであつた。出好きで、家の中にじつとしてゐるのが嫌ひであつた。一人者のおつるさんは弟の鋼さんと同居して牛込の赤城下にゐたが、ある朝近所の古い友だちの家へ行くと云つて出て行つて、そこで話をしてゐる中にうんと云つてひつくりかへつて、そのままになつてしまつた。

おつるさんは士族の出で、娘のうちから造幣局に通つてそこで一生勤め上げて、たうとう獨身を通してしまつた。若いころ造幣局の上役の人に愛されて一人男の子を儲け、その子をたよりに晩年は何不足なく暮してゐたが、その息子が早稲田の商科を出て大阪の會社に勤め、嫁まで貰つて、やれ一安心といふところで、急病でぽくりと死んでしまつた、新婚の細君のお腹に子供をのこして。

おつるさんが亡き息子の遺骨を持つて禪庵に來た時、私は氣の毒で、おつるさんの顏をまともに見ることが出來なかつたが、當のおつるさんは一向平氣で、いつもの通り元氣に話をした。一生獨身で暮すだけあつておつるさんの勝氣なのに私はひそかに驚いた。

おつるさんには兄があつた。その兄の幸太郎さんといふのは大阪で實業に從事して成功し、相當な資産をもつて蘆屋に隱居してゐる。幸太郎さんにも子供がなく、妻君のお吟さんもとうに亡くなつて孤獨であつたので、おつるさんの息子の芳雄君を養子にして後をとらせる事にしてあつたのに、その芳雄君が若くて亡くなつたので、おつるさんは兄の家に引きとられることになつた。兄の幸太郎さんといふのは、潔癖家のやかましやで、家の掃除から臺所のことまで自分でやらねば氣がすまぬといふ人であつた。おつるさんはいはゆる職業婦人型で、年はとつても働くのは嫌ひな方であつたから、この年寄兄妹が合はう筈がない。おつるさんは半年たらずで蘆屋から東京に歸つてしまひ、手狹ではあるが弟の家に一緒になつた。弟の鋼さんも家内に死に別れ、二十近

い一人の息子を抱へて小商ひをしてゐた。おつるさんは弟と一緒になつても炊事のことなどには手出しせず、逓信局時代の友だちでこれも獨身のお婆さんが同居して、おつるさん姉弟の世話をしてゐた。

さうしてゐる中に、おつるさんが腦溢血で急逝したのである。おつるさんが死んでも兄の幸太郎さんは來ず、ろくな香奠もよこさなかつたといふ。それから二年ほど經て、こんどは幸太郎さんが病氣になり看護婦と若い友人の世話になりつつ息を引きとつた。遺骨は東京に運ばれ、葬式が禪庵で行はれ、やがて黒御影の立派な石塔が立ち、おつるさんもやかましやの兄の幸太郎さんと一つところに納まることになつた。

中佐の墓

裏の山の墓地に新しい墓が建つた。「陸軍歩兵中佐××××の墓」と記されてゐる。この墓の主は、今國家の非常時を餘所に、まだ四十幾つといふ現役の働き盛りの身を以て不治の病に斃れたのである。

この中佐と禪庵とは不思議な因縁がある。中佐がまだ十一歳の少年のころ、一時この禪庵に預けられ、ここから町の小學校に通ひ、今彼の眠つてゐるこの山の墓地のあたりは、少年の彼が棒切れ持つて盛んにあばれ廻つたところである。その頃、私は彼よりも四つの年上で、すでに中學に通つてゐたが、兄弟のない私は彼を弟のやうに思つて親しくしたものであつた。

武男少年のお母さんは軍人の未亡人で、そのころ胃癌を患つて赤十字病院に入つてゐた。武男少年には兄も姉もあつたが、皆腹ちがひで、未亡人にして見ればそれらの人々に自分の子を託するに忍びず、その檀那寺である禪庵に預けたわけである。武男少年の父は輜重兵少佐で、日清戰爭に出征して金鵄勳章を賜つたが、凱旋後病氣のため四十三歳で歿し、禪庵の山の墓地に葬られてゐる。

武男君は私と一緒にそのお母さんの入院してゐる赤十字病院に見舞ひに行つたことがある。お母さんはお寺に預けたもののそのお寺の生活狀態、主として食物などのことをひどく氣にしてゐたらしく、いろいろわが子にお寺の暮しの樣子を聞いてゐるのを私も子供ながら側にゐて變な氣持で聞いたのである。お母さんは牛乳などとつて特に武男君に飲ましたりした。武男君のお母さんは三十を少し出たばかりのやさしい、聲のきれいな人で、一緒に赤十字の芝生を散歩し、武男君の持つて行つた筍飯のお辨當をベンチの上で開いて、看護婦にかくれてたべて見たりしてゐたことを私は今も憶えてゐる。それは青葉の繁る五月頃のことであつたらう。それから間もなく手術をして、その結果が惡く、八月に入つてたうとう亡くなつた。病氣が重つていよいよ危篤といふ時、武男君は迎への俥に乘せられて禪庵を出て行つた。その時の樣子が今でも思ひ出せる。

爾來三十有餘年の歳月が流れた。陸士を出て任官し、内地から朝鮮、滿洲と轉任して歩いて、二十年の軍人生活をしてゐる中に、武男君は不治の病に斃れ、その少年時代の思ひ出の地に眠る

ことになつた。

ある旗本の墓

裏山の墓地の一隅にTといふ旗本の一族の墓が數基ある。以前は二十基ほどあつたのだが明治の末年に山の手線の擴張のため墓地が買收されることになり、その時、大部分改葬合併して今では僅か數基を殘すだけとなつたが、その數基の墓へも今は手向する人もなく、この一家は全く跡が絶えて無緣墓となつてしまつたのである。

この旗本はある大名の分家で幕末のころには江戸城中で相當幅を利かしたことは『武鑑』の物語るところである。しかるに明治以後はすつかり家道が衰へて、それでも私の子供の頃までは御分家樣と稱して時々お參りがあり、その時の當主は弱々しい人でその姿は今も目に殘つてゐるが、その當主もやがて亡くなり、その妹にあたるお千代さまといふのが、これも世間向でない變つた婦人で、相當の年まで獨身でゐて、たまさかにお參りにも來たが、この婦人が亡くなつてからは全くあとが絶えてしまつた。

幕末に時めいた殿樣といふのは、月堂さまと云つて、これはなかなかの利け者であつたらしく、また道心も深く、菩提寺に對する仕向などもよく行き屆いてゐたと見えて、今日わが禪庵に殘つてゐる本堂莊嚴用の金襴の水引戸帳、打敷のたぐひ、その他のめぼしき佛具は殆んどすべてこの月堂さまの寄進によるものである。家は亡びても寺に寄附した佛具は永久に殘つて一族の菩提の

ためになる。寺へは寄附をして置くべきものだと私はこれを見るたびに思ふ。祠堂にはこの一家の立派な位牌があまた並んでゐる。私はその供養を今に怠らず、墓にも盆暮には香華を手向けることにしてゐる。

二もとの墓

禪庵の裏に椎の大樹の鬱蒼と三株茂つた細長い墓地がある。そこには禪庵世代の墓がある。その墓のならびに、私の子供の頃から一つの無銘の卵塔が建つてゐた。それは私の父が入るべく豫定されてゐる墓であつた。その後しばらくして、同じ墓地のやや離れたところに細そりとした角づくりの墓が出來た。それは母の入る墓だと母は私に云つて聞かせた。さういふわけで、私はこの圓い墓と四角い墓とを百年後の父と母の墓と考へつつ長い幾十年かを見送つて來た。

しかるに今から十三年前に、その一つの丸墓の方に父は葬られた。私は卵塔の正面に良隱塔の三字を大きく深く刻ませた。裏にその歿年月日を刻した。

丸墓には文字が刻まれたが、まだ一つの角墓がもとのままで殘つてゐた。それから十年經つた。そして十年後の春、四角い墓にも新しい法名が刻み込まれた。四角い墓は母の墓となつたのである。

幾年月、空しきから墓と眺めて來た二もとの墓が、二つながら今は香華を手向ける額づきの對象となつた。私は二つの墓を見くらべつつ、ふとこんな歌を口ずさんだ。

きろき墓はわが父の墓
角なるはわが母のはか
二もとのはか

夢窓國師素描

七朝國師

夢窓國師はいはゆる七朝國師で、建武二年に後醍醐天皇より夢窓國師の號を賜つて以來、總じて七代の朝廷よりそれぞれ國師號を下賜せられ、その國師號を全部連ねると、夢窓正覺心宗普濟玄猷佛統大圓國師となる。そして初めの三つは生前に賜つたもの、後の四つは寂後に追諡されたもの、殊に「夢窓」はその道號をそのまま國師號とせられたもので他に比類のないことである。我國に於ける國師號最初の拜受者たる東福寺聖一國師もその國師號は寂後三十年を經て追贈されたものである。

夢窓國師の法系は、建長寺高峯顯日（佛國國師）——天龍寺開山夢窓疎石——天龍寺無極志玄

——と次第して、夢窓國師の法を嗣ぐもの無極志玄以下四十九人の多きに及んでゐる。（佛祖宗派綱要）その中有名なのは、天龍寺の無極志玄、南禪寺の龍湫周澤、同善堂周信、同絕海中津、相國寺の梅中中諦、同春屋妙葩等である。無極は夢窓國師の衣鉢を繼いで天龍寺の二世となり、龍湫は夢窓門下隨一の儒僧であり、善堂と絕海とは五山文學の雙璧であり、春屋は相國寺の創立者であると共に我國最初の僧錄司として政治的にも活躍した。觀中はまた儒僧として知られてゐる。

その他、夢窓國師の弟子の數は、その名に妙の字のつく者八十八人、周の字のつくもの七百九十人、道、遍、普、昌、中、梵などの字のつくもの二千九百九十八人。律僧二十七人、教僧四百七十八人。比丘尼一千五百六十五人、優婆塞（居士）三千人、優婆夷（大姉）二千百九人。都合自筆の名簿に記された者のみで一萬一千五十五人。これに正平六年仲秋二十四日、三會院に於ける授戒者四部の弟子二千九十人を加へると、總計一萬三千百四十五員の多數となる。（天龍雜志）

容姿端麗の美僧

夢窓國師は建治元年（一九三五）伊勢の源氏の名門に生れ、四歲の時家を擧げて甲斐に移り住み、その年母を喪つた。九歲、佛門に志し、平鹽山の空阿大德に師事し、十八歲にして祝髮、南都に往つて叔父明眞に賴り、その指示によつて戒壇院慈觀律師を戒師として登壇受戒、ここに大僧となつた。初め眞言天台を學んだが、これ畢竟、生死得脫の道に非ずとして禪に歸し、百日を

期として禪坐の中、一夜夢に一僧に導かれて疎山、石頭の二寺に遊ぶと見、覺めて後禪緣の深きを知り、京に上つて、建仁寺の無隱圓範に參禪した。而して夢中の話に因んで自ら疎石を名とし、夢窓を號とした。それは永仁二年（一九五四）のことであつたが、翌三年十月には建仁を辭して鎌倉に往き、東勝寺の無及德詮、建長寺の葦航道然に歷參し、その翌年、圓覺寺桃谿德悟の會下に轉じ、その年、癡鈍空性が建長寺に住するに及び、桃谿の命によつて建長寺に入り、空性に隨侍した。

夢窓國師は眉目秀麗、容姿端正の美僧であつたのみならず、また美聲の持主であつたので、叢林では特に師を擧げて楞嚴咒の經頭とした。同五年の夏末に京都に歸り、本師の無隱和尙の巾瓶に侍した。その年の八月寧一山の來朝を知り、その宿舍を訪ひ、一見舊知の如くであつた。

正安元年（一九五九）師二十五歲、京を去つて鎌倉建長寺に入つた。その時、建長寺には一山が住してゐたので、これを慕つて走せ參じたのであつた。然るにその翌年には建長を出でて奧州松島寺に赴き、敎僧の天台止觀を講ずるを聞き、大いに歡喜し、一夜禪坐の中に悟徹するところあり、その年の暮、佛國國師（高峯顯日）に參ぜんとして那須雲巖寺に行つたが、その時佛國は淨妙寺を董して鎌倉に在り、師もまた脚疾を患つてゐたので暫らく那須に留つた。

同三年又鎌倉に歸り、建長寺に入つて一山に隨侍し、一山圓覺に晉山するに及んで師もまた從つて瑞鹿山に移り、その提撕をうけた。嘉元元年、佛國國師が京の萬壽寺に主たるを聞くや、夢

窓國師はまた京に上り佛國に參扣したが、尙ほ大休歇の地に到らず、遂に去つて陸奧の白鳥の里に抵り、深く內草山の奧に分け入つて草廬を結ぶ。一夕爐邊に禪坐し、忽ち火焰薪を離れて燃え、空中にあつて光閃電の如くなるを見て、師の胸中廓然玲瓏たるものあり。翌朝また旭日の窓の竹叢を照らし、影風に隨つて搖らぐを見て、日用の事々無礙無滯たるを得、自ら歎じて云く、これ佛祖の說いて說く能はざる本分の田地ならんと。ここに於いて大いに徹底痛快を得た。

嘉元三年二月內草を出て常陸國臼庭の里に到り、檀越比佐居士に招せられてその草庵に入る。程なくまた鎌倉に往き、淨智寺に於いて再び佛國に參じ、所解を呈し商量數次、大いに函蓋相應。師卽日辭して歸り、甲斐に親を省するや、鄕里の信徒淨居寺を以て屈請し、因つてそこに錫を止めた。

德治二年（一九六七）佛國再び京の萬壽に住するに及び、夢窓國師はその師佛國の像を畫いて贊を求め、佛國またその師佛光國師無學祖元傳ふるところの法衣、及び佛國手記の法語一篇を夢窓國師に與へて印可證明とした。以上が國師の因行であり、以下はその果行である。

轉錫遊方

延慶二年（一九六九）佛國那須の雲巖寺に隱退するに及び、國師又那須に赴いて師の安否を問ひ、佛國は國師に附屬するに先師佛光祖元の遺書を以つてした。爾來書簡の往復、使者の往來絕

ゆる事なく、床しき師弟愛が繰りひろげられた。それから二年經て應長元年には或る山中に隱山庵を創したが、翌年火災に遭つたので、出でて甲斐の淨居寺に移り、更に遠江の旅に出た。蓋し佛國、師を上州長樂寺に住せしめんとする意あるを知り、これを避けんがためであつた。往き往きて美濃に到り、長瀨山の地の幽邃寂寞無人の境なるを見てここに庵を結び、扁して古谿と稱した。古谿は後に虎谿と改めた（虎谿、一に虎溪に作る）。古谿庵の名いつしか四方に擴がり、信徒の集る者多く、ここに觀音閣を建てて禪法擧揚の道場とした。正和五年の冬、佛國の訃報至り、師は哀を擧げて厚くこれを祭つた。

文保元年（一九七七）秋九月、古谿を出でて京に上り北山に寓居してゐると、北條高時の母公覺海夫人が佛國の遺囑によつて國師を關東に請ぜんとしたので、これを避けて土佐に走り、五臺山に吸江庵を營んで住した。しかしながら覺海夫人の懇請切にしてもだしがたく、遂にその請に應じて鎌倉に還り、勝榮寺に假寓した。夫人は國師を那須雲巖寺に住せしめんとしたが固辭して赴かず、去つて相州三浦の横須賀に到り、檀越三浦貞連建つるところの泊船庵に住したが、參詣の者頗る多く柴門鎖すべくもなかつた。後の山に一基の塔を建て海印三昧塔と稱した。

元亨三年（一九八三）には、上總の千町莊に往つて退耕庵を創した。翌正中元年は國師五十歳、この年退耕庵にあり。翌年、後醍醐天皇の勅を奉じて南禪寺の住持となる。その翌年の嘉曆元年、高時壽福寺を以て師を招いたが赴かず、八月錫を飛ばして伊勢に入り、善應寺を建て、熊野鄰智

山に上り、九月鎌倉に歸り、永福寺の傍らに南芳庵を營み、翌二年瑞泉寺を開き、觀音堂を建て、その裏山の上に遍界一覽亭を構へた。

元德元年（一九八九）圓覺寺の住持となり、居ること二年、其の間、長者居士貴婦女の或は山に入り或は宅に就いて座座普說を請ふもの頗る多く、施物累積して庫裡豐かに、百慶一時に興り、說法、輯衆、修造の三者兼ね備はるに至つた。而も國師は謙して誇らず、二年秋九月、瑞泉寺に逃れ、次いで鎌倉を去つて甲州に入り、牧莊に慧林寺を創建してここに留つた。翌元弘元年二月、瑞泉寺に歸り、高時建長寺を以て迎へんとしたが辭して赴かず、また慧林寺に往き、更に播磨に赴き瑞光寺を開いた。

建武元年（一九九四）後醍醐天皇の勅を奉じて南禪寺に再住したが、居ること二年にして京都兵亂のため退いて嵯峨の臨川寺に移り、延元四年『臨川家訓』を門人のために書いた。その年、西芳寺に住し、又靈夢を感じて天龍寺の造營に着手し、翌年落成、その結構莊麗、その落慶供養の盛儀は『太平記』に詳かである。その年、阿州太守細川顯氏、補陀寺を建てて師を開山とした。

正平元年（二〇〇六）天龍寺に於いて龜山十境の詩を賦し、以て敎外別行の道場たることを表し、天龍の住持を辭して臨川寺に退休し、同三年、佛國先師の三十三年忌に遭ひ法會を嚴修した。

正平六年八月には謹んで後醍醐天皇御十三回の聖忌を肅修し奉り、その年の九月三十日、夢窓國師は七十歳を以て示寂した。

著述と歌集

夢窓國師の開基の寺は『和漢禪刹次第』に臨川寺以下十五箇寺を擧げ、住山の大刹は、瑞龍山太平興國南禪禪寺第九世、再住（南禪住持籍）、靈龜山天龍資聖禪寺第一世、再住（扶桑五山記）、萬年山相國承天禪寺第一世（五山記）、瑞鹿山圓覺興聖禪寺第十五世（五山記）、金峯山淨智禪寺（五山記）、功臣山興聖寺第一世（關東十刹位次）等である。

夢窓國師には多くの著述がある。『夢窓國師語錄』を始め、『夢中問答』『二十三問答』『谷響集』『西山夜話』『臨川家訓』『正覺國師和歌集』等々、その中でも『夢中問答』は最も有名で、禪門假名法語中の白眉である。

次ぎに、夢窓國師と當時の諸禪德との交渉を見るに、大燈國師とは其の間柄あまり面白くなかつたらしく、正中二年內裏に於ける夢窓國師の問答を大燈國師は批評して「未だ敎綱を出でず、達磨の一宗地を掃つて盡く、可悲々々」（花園天皇宸記）と云つてゐる。

關山國師が夢窓國師に燒き餅の饗應をしたのは名高い話である。

惠玄妙心寺に住せられしころ、天龍寺夢窓國師嵯峨より入京の折ふし、寺前を過ぎ給ひける間、人をして關山を訪はせられけるに、折りよく關山住坊にまして、やがて破れ衣を整へて走出、先づ御入寺せしめ給へとて引導して住坊に入り、快く對談ありて後、國師へ饗應いたすべきが貧賤なれば心外なりとて、破れたる硯箱より四五錢を取り出して近隣の在家へ小僧を走せてやきもちといふものを買はしめ、夢窓へもてなされけるとぞ。夢窓もこれを見給うていぶせきながら關山の志の切なるを感じ入りて賞食ありてこころよく謝して退出せられけるとなん。（塵塚物語）

夢窓國師と明極楚俊禪師との交友は『明極楚俊遺稿』及びその附錄「夢窓明極唱和」の偈頌に見るべく、竺仙梵僊禪師との交渉は『天柱集』所收の「與南禪夢窓和尙書」に見るべく、中巖圓月禪師との關係は『東海一漚集』卷一、七言律詩「寄夢窓國師」の一篇に見るべく、淸拙正澄禪師との應酬は『淸拙和尙語錄』卷八所收の「寄南方菴夢窓和尙」「寄淨智夢窓和尙」二篇の偈頌及び『夢窓國師語錄』中卷所收の「和淸拙和尙韻」一篇の偈頌に見ることが出來るであらう。

その他俗士との交友は『正覺國師和歌集』に見られる。橫須賀の泊船庵をすてて、總州退耕庵に赴く時、泊船庵の檀那なる三浦貞連に與へた歌に

うかれいづることを恨みと思ふなよありとてもまたあり果てむかは

足利將軍兄弟打ちつれて臨川寺に國師を訪れ、法談の後、嵐山の花を見て、夢窓國師

誰れもみな春はむれつつ遊べどもこころのはなを見る人ぞなき

相州三浦の橫須賀なる泊船庵に中納言爲相卿の訪ひ來られたるに、

假りにすむいほり尋ねて訪ふひとをあるじがほにてまた送りぬる

爲相卿のかへし

遠からぬけふの舟路のわかれにもうかびやすきはなみだなりけり

總州退耕庵に、ある人の來て、住居の珍らしさに心のとまるよしを云へば、

珍らしくすみなす山のいほりにもこころとむればうき世とぞなる

風流韻事

夢窓國師は和歌のみならず、連歌を好んだことが『筑波問答』に見えてゐる。

連歌はことに心あらむ人、おもひ入りてし給ふべきにや。されば近くは佛國國師、夢窓國師など、晝夜もてあそばれし事、定めてやうあるらむ、定て心得も侍るべし。（筑波問答）

その作は、『菟玖波集』に少なからず載せられてゐる。

西芳精舍の花の比、夢窓國師池水に船をうけて、百韻連歌侍し中に、

雲に霞やたちかさぬらん、

峯にちる花こそ谷のこずゑなれ（二品親王）

その二月のあとをこそとへ

一ふさの花や老木に殘るらん（夢窓國師）

夢窓國師はまた繪畫が上手で、好んで觀音像及び草花を描いた（畫工便覽）。『三國傳記』卷四

には「夢窓國師は聰敏上智にして學を勤めて倦むことなく、釋典乃至孔孟莊老教及び世間伎藝才能皆以てその奥旨を究む」とある。從つて繪畫のみならず、書道にも達し、その墨蹟の今日に傳はるもの少なからず、天龍寺、西芳寺、鹿王院、毘沙門堂、相國寺、黃梅院等に傳はれるものは、いづれも眞蹟の逸品である。その落款は多く「木訥叟書」とあり、稀れに「夢窓書」とあるのも見受ける。

天龍寺所藏の臨川樓上の觀音像に題した語に、

水月道場天地潤、一樓影現百千樓、圓通不洗圓通耳、門外洪川日夜流

鹿王院所藏の雙幅には、

青山幾度變黃山、浮世紛紜惣不于

眼裏有塵三界窄、心頭無事一床寬

夢窓國師の畫像は皆自賛あり、圓覺塔頭黃梅院に藏するものは「夢窓國師畫像」と題し、西芳寺に藏するものは「開山國師尊容」と題し、天龍寺に藏するものは「夢窓國師畫像」と題し、相國寺に藏するものは「開山國師肖像」と題し、鹿苑寺の所藏にかかるものは「夢窓國師自賛像」と題する。外に鹿王院に藏する頂相は最も名高く、黃梅院所藏の頂相と竝んで國寶である。

夢窓國師は造園の名人にして枯山水庭園の創始者である。相阿彌の名園龍安寺の虎の兒渡しも、大仙院の石庭も、銀閣寺の銀沙灘も、皆夢窓國師の枯山水に源を發すると見てよからう。西芳寺

の裏の指東庵の枯山水と、天龍寺の林泉と、塵王院の竹庭とは、夢窓國師の經營に成つたもの、特に嵯峨の竹は國師が風致と利殖とのために植ゑ始めたもので、今ではその地方の産業となつてゐる。國師はまた茶道にも關係があり、大應國師が支那から持ち還つた臺子は天龍寺に傳はつて東山の君臺觀式の茶道の本となつたと云はれる。若し夫れ夢窓國師の宗教的、社會的大事業としては安國寺利生塔の建立を擧げねばならぬ。日本六十六箇國に安國寺利生塔を建てさせた事は、元弘以來の亡魂の冥福祈願と、幕府の勢力强化の一石二鳥であつた。時の爲政者にこれを實行させた夢窓國師の政治的手腕も偉いものと云はねばならない。而して天龍寺は安國寺の總本寺で東大寺の國分寺に於ける關係であつたのである。

白隱禪師と日本佛教

日本佛教の正統

白隱禪師は地理的に云へば原の白隱で、駿河の富士山と名を等しくされた方であり、これを時代的に見れば、江戸時代佛教の第一人者であり、これを宗門の上より見れば臨濟中興の祖師であ

ります。が、私は白隱禪師を日本佛教の上から觀察して見ようと思ふのであります。駿河の富士は日本の富士山であるやうに、白隱禪師も日本佛教史上の白隱禪師であるのであります。

白隱禪師を日本佛教の上に見るとしても、これまた種々の觀方があると思ふが、私は三つの方面から眺めて見ようと思ひます。第一は日本佛教の正統を繼承せられたる白隱禪師、第二は日本佛教を統一せられたる白隱禪師、第三は日本佛教を純粹化せられたる白隱禪師、これらの三つの點について御話いたさうと存じます。

第一、白隱禪師は禪の正系を繼がれたのみならず、日本佛教の正統を受け繼がれた方であります。日本の佛教は法華に始まつて法華に終ると云つてもよい位に法華思想がその中心をなしてをります。日本佛教の脊髓を成すものは法華であります。日本佛教は聖德太子に始まるのでありますが、聖德太子の最も尊信せられた經は法華經であります。法華經は勝鬘經と共に聖德太子によつて我國に最初に說かれた經典であり、『法華經義疏』は『勝鬘經義疏』『維摩經義疏』と共に聖德太子によつて我國に最初に造られた章疏であります。聖德太子は、また南岳惠思禪師の再來とも言はれてをります。惠思禪師は天台智者大師に法華を傳へた人であります。かやうに聖德太子と法華とは深い因緣があり、日本佛教と法華とはその出發點に於て深い因緣を持つてゐるのであります。

この法華に依つて一宗を開いたのは、我國に於ては、云ふまでもなく傳敎大師でありますが、

傳教の日本天台は顯密雙修をその特色とするもので、法華のみではありません。法華經のみを單獨に宣揚したのは、云ふまでもなく日蓮でありますが、日蓮を去ること四百五十年にして法華の眞意義を發揚した大人物がある。それが我が白隱禪師であります。

白隱禪師と法華經とは、また頗る因緣が深いのであります。白隱禪師年譜『因行格』によると、禪師は七歳の時、或る寺で法華經提婆品の講義を聽き、家に歸つて聞いた通りの說經をそのまま語つて聞かせ、周圍のものを驚かしたといふことであります。

十一歳の時には、母につれられて町の昌源經寺に『摩訶止觀』の講義を聞きに行つたが、地獄の相を語るを聞いて、恐ろしさに身の毛のよだつ思ひをした。十二歳の時、村の祭禮に子供芝居で鍋冠り日進を演ずるを見、「法華の行者は火に入つて燒けず、水に入つて溺れず」といふことを聞いて歸り、數日至心に普門品を誦して後、燒火箸を以て股に著けたところが皮膚が焦爛れて苦痛に堪へなかつた。ここに於いて、自在の身を得んとするの志を起し、十五歳にして出家得度した。それは恰も元祿九年のことであります。

出家得度の日、白隱禪師は、

若し肉身にして火燒く能はず、水漂す能はざる底の力を得ざれば設ひ死すとも休まじ。

と誓はれてをります。

元祿十三年の條（禪師十六歳）には、嘗て法華は一代經王たることを聞き、これを閲するに、

只除二唯有一乘諸法寂滅等之文一餘皆因緣譬喩說也、遂掩レ卷嘆曰、此經若有二功德一諸史百家諺書妓典之類、亦當レ有二功德一、大失二懷素一、憤々不レ樂、從レ是特疑二別傳一著一。（因行格）

とあります。

然るに、享保十一年四十二歳の條には、

秋七月、讀二法華經一、一夜讀二到譬喩品一（中略）……從前、多少悟解、了二知大錯會一。所二以經王爲レ王璨二乎于目前一。不レ覺放レ聲號泣。初徹二見正受老人平生受用一。及レ了二知大覺世尊舌根缺二兩莖筋一。自レ此得二大自在一佛祖向上之機、看經之眼、徹底了當而無二餘蘊一。（因行格）

とあります。白隱禪師は法華經に出發して法華に到達し、法華によつて大悟徹底を得たのであります。

四十三歳（果行格初）から八十四歳に至る、四十年の果行化他の大活動は、法華經によつて得た悟道がその根柢をなしてゐると申してよいのであります。即ち白隱禪師は、聖德太子以來、傳教大師以來、日本佛教の脊髓をなせる法華の精髓を最も完全に把握し、最も完全に發揮したものと申すべきであると思ひます。

日本佛教の統一

第二は、佛教統一者としての白隱禪師。

白隱禪師は日本佛教を統一された最後の一人でありました。日本佛教に一種の統一を與へた最初の人は傳敎大師でありますが、白隱禪師はその最後の人であります。

奈良佛敎は六宗競ひ立ち、大小權實竝び存して、そこに中心といふものを見出し得なかつたのでありますが、傳敎大師はこれを統一して平安佛敎を開き、それを統一するに法華を以てしたのであります。然るに、傳敎の日本天台は顯密雙修を以てその特色とし、止觀業と遮那業が竝立し、遮那業卽ち天台密敎は、弘法大師の眞言密敎と對立して所謂台密、東密の區別を生じ、止觀業の四種三昧からは、第二の常行三昧が獨立して念佛三昧となり、彌陀信仰となり、慈覺、相應、延昌、空也、惠心、永觀、良忍を經て法然上人に至つて淨土の一宗が開かれるといふやうに、だんだんと分裂して行きました。

これの統一を計つたのが榮西禪師で、鎌倉初期に於ける禪道佛法興隆の意義がそこにあるのであります。榮西禪師は、その著『興禪護國論』に於いて、

禪宗諸宗極理。佛法總府。
外律儀防レ非、內慈悲利レ他、謂二之禪宗一、謂二之佛法一也。
此禪宗是如來禪也。不立文字宗也。與而言レ之通二諸大乘一奪而言レ之離二心意識一離二言說相一矣。

と述べ、

道元禪師も、その著『正法眼藏』「佛道」に於いて、大體同じ意味のことを述べて居ります。

鎌倉以後は從來の顯密二敎の外に、新たに淨禪法華の三宗鼎立し、それが更に分裂に分裂を重ねて行つたが、これを五百年後に統一したのが我が白隱禪師であります。

白隱禪師はその著『遠羅天釜』に於いて、次の如く述べて居られます。

心外に法華經なく、法華經外に心なく、心の外に十界なく、十界の外に法華經なし。是れ卽ち決定至極の法理にて、愚老に限らず、三世の如來も、十方の賢聖も、極處に到りては皆々斯の如く說き玉ふ事にて、法華本文の大意は、大段これらの趣を宣べ玉ひたる事にて、此の外にも八萬四千の法門を宣べ玉ひたれども、皆權敎の說にして方便門を出でず、至極に到りては、一切衆生と三世十方の如來と、山河大地と、法華經と悉く不二同體なる法理を諸法實相と說き玉ひたる、是れ卽ち佛道の大綱なり。大凡そ、世尊一代頓漸祕密不定の法門あつて、無量の妙義をのべ玉ひて、五千四十八卷の諸經あれども、其の中至極の旨は、法華一部八卷の裏に促り、法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は、妙法蓮華經の五字に促り、妙法蓮華經の五字は、妙法の二字に促り、妙法の二字は、心の一字に歸す。心の一字は、却て何れの處にか歸すとならば、兎角龜毛別山を過ぐ、畢竟如何。

又曰はく、

若し無の字と稱名と兩般の看を成さば、須らく知るべし、盡く是れ邪魔外道の種族なることを。悲しむ所は今時淨業の行者、往々に諸佛の本志を知らず。西方に佛在りとのみ信じて、

西方は自己の心源なりと云ふことを知らず。念佛の功課に依て、虛空を飛過して、死後淨土に行かんとのみ覺悟す。殊に知らず、十方佛土中唯有一乘法なることを。此の故に云ふ。佛身法界に充滿して普く一切群生の前に現ずと。若し佛、西方にのみおはさば、一切群生の前に現じ玉ふこと能はじ。若し一切群生の前に現ぜば特り西方に限るべからず。悲い哉、如來清淨の眞身は煥爛として目前に分明なること掌を見るが如くなれども、慧眼既に盲る故に、都て是れを見上つること能はず。豈に言はずや、光明遍照十方世界と。蓋し光明と世界と兩般の會を成し玉ふべからず。悟るときは十方世界草木國土を全うして、眞に是れ如來清淨光明の眞身とし、迷ふ時は、如來清淨光明の眞身を全うして、錯つて十方世界草木國土とす。又、往生、來迎を釋しては、

專唱稱名、一念不生、放身捨命の端的を往と云ふ。三昧發得、眞智現前の當位を生と云ふ。如上の眞理、煥然として當處湛然、一毫も隔てず湧出するを來迎とす。來迎往生、眞下不二、是れ見性の當體なり。

須らく知るべし、話頭も稱名も、總に是れ開佛智見道の動因なることを。開佛智見は、諸佛出世の本志なり。後來且く方便を設けて、往生と名づけ見性と云ふ。豈にそれ兩般あらんや。大凡そ世尊一代五千餘卷の金文ありて、頓漸祕密不定の妙義を說き演べ玉ひたれども、畢竟此の見性の大事を出でず。（遠羅天釜續集）

佛教統一の思想精神がここにはつきり現はれてゐるではありませんか。この意味に於いて私は白隱禪師を日本佛教の最後の統一者であると申すのであります。

日本佛教の純粹化

第三に、白隱禪師は日本佛教を純粹化した人であります。

奈良、平安時代の佛教は概して複合的であります。南都六宗は各學派であつて、今日の宗派の如く個々獨立したものではなく、各寺々に二三の學派が附屬してゐたので、複合的特色を多分に持つてゐたのであります。叡山佛教は、前申す通り顯密二教の複合であり、平安時代の信仰は法華信仰と阿彌陀信仰と陀羅尼信仰との複合であり、殊に法華信仰と阿彌陀信仰とは不可分の關係にあり、「晝は法華を讀み、夕には彌陀佛を念ず」といふのが、當時一般の行事となつてゐたくらゐであります。法華と阿彌陀、卽ち經佛共信が平安時代の信仰狀態であつたのであります。この經佛共信の複式信仰が、一佛一經の單一信仰になつたのが鎌倉佛教で、彌陀一佛による淨土の信仰と、法華一經による日蓮法華の信仰とがそれであります。その經をも捨て、佛をも捨て、經に依らず佛に依らず、ただ一心を基とするのが禪宗であります。經佛共信の複式信仰から一佛一經の單一信仰へとだんだん純化されて來た日本佛教は、禪に至つてその極に達したのであります が、併し實際に於いては禪にもやはり不純物が雜つてゐない譯ではなかつたのであります。禪は

鎌倉期に於いて彼我の禪僧によつて傳へられたのでありますが、その禪は當時、支那に於いて盛んであつた宋代の儒學、卽ち朱子學を伴つて來たのであります。當時の禪の宗匠達は、禪道佛法を說く傍ら、儒敎をも說き、儒を以て禪を說く方便にしたのであります。ここに於いて禪儒の思想は一致し、是れが五山文學となつて、吉野時代から室町末期にかけての思想界を風靡し、文權が禪僧の手に歸するやうになりました。

五山文學は、文化的に貢獻するところが著しかつたのでありますが、禪の第一線はこれがために大いに異狀を呈し、五山の法系は遂にこれがために斷滅し、二十四流の中、僅かに大應、大燈、關山の一系がその法脈を傳へたに過ぎないのであります。その應、燈、關の一系も、江戸の初期に黃檗隱元が來朝し、明末に支那に起つた念佛禪を傳へるに當り、またそこに一種の不純物を添へるに至りました。日本に於ける隱元の行事を報じた當時の書狀に、

一、朝暮勤行の末、大衆南無阿彌陀佛の行道、鐘鼓、木魚等の唱物拍子面白候、併日本にては不相應の儀式毎日針ヒ耳者也云々。

一、坐禪の儀式はいかにも殊勝に見え申候。總じて淨々見申候に、外は淨土宗に似、內は禪宗の樣に存候。是雲棲の軌範故乎。（妙心寺史）

とあります。

白隱禪師は『遠羅天釜』の中でこの事に言及し、

大明の末に至つて、雲棲の秩宏なる者あり。參玄力足らず、見道眼暗うして、進むに寂滅の樂なく、退くに生死の恐あり。悲嘆押へ難く、終に遠公蓮社の遺韻を慕うて祖庭孤危の眞修を捨て、自ら蓮池大師と稱して彌陀經の疏鈔を造り、大に主張して後學を引く。

と云つて非難し、是れを純化して眞風相續の必要を力說して居られるのであります。

そして、『遠羅天釜』の最後に於いて、更に述べて云はれるには、

大明以來、此の黨甚だ多し。盡く是れ庸才儒弱の禪徒なり。三十年前さる老宿の悲嘆せられけるは、嗟衰へたる哉、向後三百年を過ぎば、天下の禪苑盡く總叢を張り、木鐘を据ゑ、六時禮讚四隣を驚かすに至らん、と云うて落涙せられける由、寔に恐るべし。老僧最後の親切の一着あり、眉毛を惜まず（中略）擧揚し去らん。（中略）作麼生か是れ親切の一句。僧、趙州に問ふ、狗子に還つて佛性ありや否や。州曰、無。

白隱禪師は法華經によつて日本佛敎の正統を承繼されたと共に、その日本佛敎を統一するに禪を以てし、日本佛敎を純化して一無字に歸一せられたのであります。而して禪の念佛化も杞憂に終つて、今日、臨濟の正宗が炳乎として存するのは全く白隱禪師の賜でありまして、その恩德、如何に鑽仰し奉るもなほ盡きないのであります。

澤庵和尚の思想と生活

紫野の佛法

澤庵和尚が、晩年に小出吉英に宛てた書翰の中に「紫野の佛法、今の世には用に立ち不申候」といふ文句がある。「紫野の佛法」とは、云ふまでもなく、大燈國師一流の大德寺の佛法のことで、「今の世には用に立ち不申」とは、それが今は行はれなくなつた時代である、といふことであらう。

「紫野の佛法」と特に限定すると、それに對して紫野以外の佛法といふものが考へられるが、そこに對蹠的に擧げられるのは五山の禪である。夢窓國師以來、義堂、絕海以來の五山の禪が詩文、學問に墮して正法を失つた時に、支那徑山の虛堂和尚から大應國師（南浦紹明）へ、大應國師から大燈國師（宗峯妙超）へ、大燈國師から關山國師（無相大師關山慧玄）へと傳はつた松源一流の正法を固守して來たのが「紫野の佛法」である。紫野の佛法が榮えたのは、大燈、關山兩國師の時代は別として、その後に於いては、一休和尚から澤庵和尚に至る約二百年間である。一

休が泉州堺の豪商尾和四郎左衞門宗臨の外護によつて、應仁の亂で燒失した紫野大德寺の塔頭、伽藍を復興して以來、大德寺は堺といふ土地、及びその土地の人々と深い法緣を結ぶやうになつた。

その頃の堺は、九州の博多と同じく南蠻貿易の要港として經濟の中心であると共に、一種の文化の中心であつた。堺衆と稱するその地の富豪連は、茶湯や和歌や連歌に好いた數寄者であると共に、禪門に出入して坐禪の修行にいそしむ熱心な求道者であつた。そしてその接得指導に任じたのが大德門下の諸禪德で、一休は恐らくその最初の人であつたであらう。堺の人にして一休の禪に參じた者には、尾和宗臨の外に、醫者の半井道三があつた。半井家は名醫の家柄で、道三以後堺に居住して代々朝廷の典藥に奉仕し、一休の寺である大德寺の眞珠庵を菩提所とした。堺にはまた紫野の歸依者で阿佐井野宗瑞といふ名醫があつた。この人は大永八年に我國最初の醫書たる明版の『醫書大全』九卷を飜刻し、また天文二年に『論語集解』二冊を再刻した。これが有名な天文版の論語で、現にその版木が堺の南宗寺に殘つてゐる。かやうに堺から醫道の大家が二人も出て、その子孫が代々その業を繼いで堺に居り、而も代々紫野の篤信者であつたことを考へると、後年、堺に遊學し、南宗寺にも永く住したことのある澤庵和尚が醫學に興味を持ち、その方面に深い造詣を持つてゐたことは、環境的に見て頗る自然なことであると思ふ。

一休の後に堺に來て庵を結んだ大德寺の名僧に大聖國師古嶽宗亘がある。古嶽は文永六年にそ

の庵を南宗庵と名づけたが、これが後に南宗寺と改稱されたのである。古嶽は、後柏原天皇より禪師號（佛心正統）を賜はり、後奈良天皇より國師號（正法大聖）を賜はり、剩へ「非三朕一人之師而已。天下模範也」（金湯抄）といふ有難い宸翰をさへ賜はつたほどの名僧であつて、澤庵和尚が大燈國師に次いで尊崇する紫野の佛法中興の祖であり、大德寺大仙院派の始祖でもある。

この大聖國師の法を嗣いだのが普通國師大林宗套で、これがまた師に劣らぬ傑僧であつた。後奈良天皇より禪師號（佛印圓證）を賜はり、正親町天皇より國師號（正覺普通）を賜はり、嘗て清涼殿に召されて對坐說法、御下問に奉答して叡感に預つた。その頃堺の地によつて天下に號令してゐた戰國の梟雄三好長慶は、深く普通國師に歸依し、南宗庵を改めて大禪苑を起し、南宗寺と名づけて國師を開山第一祖とした。堺の茶人武野紹鷗ははじめ大聖國師に參禪し、のち普通國師に參じて道源を極め、茶祖珠光に始まるわび茶に更に一層の禪味を加へ、これを利休に傳へた。紹鷗の孫の宗朝は出家して澤庵和尚の弟子となつたが、のち還俗して尾張侯に仕へ、文筆に長じて、後年、澤庵和尚の年譜を撰した。

堺の富豪にして和歌連歌を能くし、茶湯に好き、劍道馬術にも達してゐたといふ谷宗臨も、始め大聖國師の室に入り、のち普通國師の爐鞴（ろばい）に投じて已（こ）事を究明し、大成宗臨の道號を授けられた。宗臨の孫の宗印は深く澤庵和尚に歸依し、寛永五年に堺に祥雲寺を建てて和尚を開山とした。

紹鷗の歿後、茶道の師範に推された北向道陳は、堺の革屋で富豪を以て聞え、本姓は荒木といつたが、舳松の北向の家に住つてゐたので北向を姓とした。道陳は茶湯の法を千利休に傳へ、又禪門に歸して普通國師の化導を受け、南宗寺の外護者となつた。

道陳と紹鷗とから茶湯の法を承けてこれを大成したのは、同じく堺の人千利休であつた。利休は初め南宗寺普通國師について禪旨を受け、のち大德寺古溪和尚に參禪すること三十餘年にして、その蘊奥を極めた。茶湯に於いて利休と名を等しくした津田宗及は、普通國師に參禪して天信といふ道號を授けられ、後、堺に大通庵を創して大德寺の春屋宗園（圓鑑國師）を請じて開祖とした。その宗及の子が江月和尚で、それが春屋の法嗣（はつす）となるといふ風に、大德寺と堺とは切つても切れぬ八重の關係になつてゐるのである。

普通國師（大林宗套）の法嗣笑嶽和尚は、永祿元年勅を奉じて大德寺に住し、織田信長、豐臣秀吉、三好義繼、足利義昭等の歸依を受け、正親町天皇からは特に禪師號（祖心本光）を賜はつた。信長は政務の餘暇、法を笑嶽に問うて道號を求め、元龜三年には十九町の土地を大德寺に寄附して永く課役を免じた。天正十年、信長が本能寺の變に於いて光秀に弑せらるるや、笑嶽はその導師となつて葬式を營み、秀吉は大德寺の中に總見院を建ててその遺骨を葬つた。

秀吉の大德寺に於ける關係は更に深いものがある。彼は笑嶽を初めとして玉仲・古溪・竹澗・玉甫等、その頃の紫野の諸禪德について宗門の事を扣いたのみならず、利休を通じてこれらの禪者と方外の交りを結び、數寄の道に遊んだ。彼はまた一千五百石の地を大德寺に寄せると共に、

總見、天瑞の二院を寺內に創立した。

三好義繼は父長慶の菩提所として大德寺に聚光院を建て、笑嶽を第一世とし、足利義昭は、笑嶽が普通國師の歿後南宗寺の二世を嗣ぐに及び、南宗を十刹の一に列せしめた。

笑嶽和尙には春屋宗園、古溪宗陳、仙嶽宗洞、一凍紹滴ら四人の法嗣あり、春屋は永祿十二年に、古溪は天正元年は、仙嶽は同七年に、一凍は文祿三年にそれぞれ勅を奉じて本寺たる大德寺に出世し、また相次いで南宗寺に住した。春屋は正親町天皇から朗源天眞の禪師號を賜はり、後陽成天皇から大寶圓鑑の國師號を賜はつた。慶長四年に石田三成は江州佐和山に瑞岳寺を創して圓鑑國師を屈請して開山となし、黑田長政は大德寺に龍光院を建てて父如水の香花院とし、國師を開祖とした。その他茶道の宗匠古田織部、津山城主森忠政らも國師の隨喜者で、殊に忠政は本山に三玄院を營んで國師退休の場所とした。

古溪は秀吉及び利休と深い關係がある。秀吉と利休とが不思議な順逆の因緣に結ばれてゐた如く、古溪と秀吉との關係にも順逆があつた。秀吉は古溪に歸依して大德寺に總見、天瑞の二院を建てたが、天正寺問題では古溪を罪して太宰府に流した。あれほど親任されてゐた利休が木像問題で一朝にして死を賜はると、この事件は延いて古溪の主たる大德寺を滅亡にまで導かうとしたが、古溪の道力よくこれを沮んで事なきを得た。この天正の法難は法度事件による寬永の法難の前驅とも見られ、澤庵和尙は古溪和尙の道を歩いたものとも見られる。

春屋、古溪の法弟たる一凍紹滴（明堂古鏡禪師）は澤庵の師である。文祿二年大德寺に出世して後、退いて堺の陽春庵に居り、晩年南宗寺に移つた。澤庵は慶長五年から九年まで一凍禪師に隨侍して辛酸苦修、遂に大事を了畢してその法を嗣いだ。一凍の法嗣澤庵は、春屋の法嗣玉室及び江月と共にその時代に於ける紫野の佛法のトリオであつた。

以上は「紫野の佛法」の概觀であるが、その禪化が朝廷を初め奉り、公家、武家、町人の各階級に亙り、太閤、關白、大臣、將軍、武將、大名、茶人、歌人、連歌師、俳諧師等あらゆる身分に及んでゐたことは、紫野の佛法の社會的感化力の大きかつたことを物語るものである。紫野の禪僧がいづれも朝廷から國師號、禪師號を賜はるやうな、一世の師表たるべき禪傑であつたと共に、その參禪者の各々が、それぞれ道源心要に徹した居士であつたので、その社會的影響は著しいものがあつたであらう。茶道を通じ、和歌、連歌、俳諧を通じて禪の普及したことは想像以上であつたと思ふ。その禪道佛法の大元締たる紫野の佛法が、今の世には用に立たなくなつたと、澤庵和尙は述懷してゐるのである。そこに紫野の佛法の最後の一人としての澤庵和尙の悲壯な氣持が見えるではないか。

紫野の佛法に對するものは、前に述べた通り、五山の佛法である。五山はむしろ學問の淵叢であつて、そこには最早佛法はなかつた。もし佛法といふのならば、それは御用佛法であり、官僚佛法であり、文字禪であつた。義堂周信、絕海中津の義滿將軍に於ける、瑞溪周鳳の義政將軍に

於ける、策彦周良の信長に於ける、西笑承兌の秀吉に於ける、以心崇傳の家康に於ける、いづれもその政治顧問として政治外交の樞機に參したものであつた。その中で義堂と絶海とは五山文學の雙璧であり、義堂の『空華集』と絶海の『蕉堅稿』とは五山文學の至寶である。それらの五山の長老が政治的に活躍した消息は、僧錄司の日記たる『蔭涼軒日錄』『鹿苑日錄』及び金地院崇傳の日記『本光國師日記』に明らかである。黑衣の宰相金地院崇傳が僧錄司として南禪寺を背景として五山の上に君臨し、天龍、相國、建仁、東福、萬壽等の五山諸刹を統率して事毎に大德・妙心を壓迫した形跡は『本光國師日記』に歷然と見えてゐる。紫野の佛法の最後の一人たる澤庵和尙と、五山派の頭目たる金地院崇傳とは何時か正面衝突をしなければならぬ形勢になつてゐた。法度事件は遂に二人を正面衝突させてしまつたのである。

天下一變

澤庵和尙は、元和元年大坂落城の直後に、村尾彦右衞門といふ居士に與へた手紙の中に、「扨も扨も天下一變の後、音信不通、旦夕床しく候」と書いてゐる。豐臣が滅んで德川の世となつた天下の一變を目のあたりにした和尙の感慨は深かつたであらう。「かやうに移り變る世の中とは、誰しも思ひながら……申しても申しても盡きぬ事ども」であるとも書いてゐる。「我等式の類ひは獨り無常の窓に向ひて、獨言いふて暮す計に候」とも書いてゐる。和尙の心にはこの天下一變

の大無常が大きく强く響いたのであらう。それがあの人の人生觀の基調をなしてゐるのではないかと思ふ。

この「天下一變」がやがて澤庵和尙の身の上に小型に繰り返されることになつた。大德寺、妙心寺法度違背問題に基く上ノ山配流事件がそれである。和尙の生涯はこの配流を以て一線を劃することになる。配流以前と配流以後、そしてここで語らんとする澤庵和尙の生活は主として配流以後のことに屬するのであるが、その前に配流以前の和尙のことをざつと語つて置かう。

澤庵和尙は天正元年に但馬の出石に山名の家來秋庭能登守綱典の子として生れ、幼にして唱念寺といふ淨土宗の寺に弟子入りして名を春翁と稱したが、十四の年に宗鏡寺に入つて禪門の業を受けることになり、希先和尙について得度して名を秀喜と改めた。十九年に希先が遷化してからは、京都から來た大德寺の董甫に隨つて參學、文祿三年に董甫に隨侍して上洛、大德寺中三玄院に於いて春屋國師に參禪し、宗彭の名を授けられた。後、堺に行つて南宗寺の古鏡禪師一凍和尙の爐鞴に投じて辛酸苦修すること五年、遂に修行を完成してその印記を得、澤庵の道號を授つた。それ以來澤庵宗彭と稱した。時に慶長九年三十二歲であつた。十一年、古鏡が遷化したので翌年先師の芳躅を繼いで南宗寺に住し、越えて十四年に勅を奉じて大德寺に出世し、住山三日にして退いて南宗寺に歸つた。元和元年の大坂夏陣にはいち早く開山普通國師の像を奉じて京都大德寺に難を避けたが、この戰亂で南宗寺は丸燒けとなつた。そこでその復興に力を盡し、山名、小出

の諸侯と力を戮せて經營し、三年の間に舊觀に復し、やれやれと一安心してゐるところへ、例の法度事件が持ち上がつた。

元和元年に家康は幕府新政の手始めとして公家、武家及び諸宗に對してそれぞれ法度を發布した。禪宗に對しては五山十刹法度の外に別に大德寺、妙心寺法度といふものを出して、同じ臨濟宗でありながら大德寺と妙心寺とを特別な法令によつて取締ることにした。これは大德寺と妙心寺とが花園天皇と後醍醐天皇の御願所であつて、その格式に於いて五山と異なるものがあるためでもあつたが、つまるところは臨濟の正脈を傳へてゐる紫野の佛法及びその一つ系統である花園の佛法と、官僚宗詩文宗たる五山の佛法との對立に外ならなかつた。そしてこの法文の立案者及び起草者が五山派の頭目、官僚宗の親玉たる僧錄司金地院崇傳であつたことは勿論である。崇傳は紫野の佛法（花園妙心寺も含めて）をやつつける砒礪（とくざい）をこの法度の條文の中にさつそく盛つたのである。大德寺、妙心寺法度五箇條中の第二條がそれである。そこには大德寺妙心寺の出世入院の資格を規定して「參禪修行は善知識について三十年綿密の工夫に費し、千七百の古則公案を了畢の上、諸老の門を遍歴し、普く請益（しんやく）を遂げ、眞諦俗諦成就の者」でなければならぬとしてある。そしてこの出世規定の條文は五山十刹法度にも永平寺法度にもなく、ただ大德、妙心の法度のみに見えてゐるのである。出世入院といふのは、禪僧にして參禪修行の完成したものが勅命を奉じて本寺に住することで、當時の禪僧にとつての最高の資格であり、最上の名譽であつた。

「三十年綿密の工夫、千七百則の話頭了畢」——崇傳のこつそり盛つた毒藥はこれである。これを單なる修飾的辭令と見てしまへばなんでもない。實際この法度の出た當座は誰もこれを問題視する者もなく、大德寺、妙心寺側でも無論氣にもかけず、それ以後も慣例によつて勅許を得て紫衣を着用して出世入院の儀を取行ひ、朝廷におかせられても從來通りの手續きによつて勅許の綸旨を御下附になつて居られたのであつたが、寛永四年に至つて幕府は改めて出世入院に關する條目を發布し、その取締りを嚴重にし、元和法度の違背者を調べあげた。調べたところで引つかかるのは、大德、妙心寺法度の第二條の違反者だけで、この條文を含んでゐない五山十刹側は何等の痛痒も感じないわけである。五山側が涼しい顏をしてゐる間に、大德寺側では元和以後勅を奉じて大德寺に出世した十五人の僧が元和法度の違背者として處罰された。妙心寺に對しても同樣のことが行はれた。その處罰といふのは紫衣を剝ぎ綸旨を奪ふことであつたが、これが皇室に對し奉つての大權干犯であることは申すまでもない。ここで云ひ添へて置かねばならぬことは、幕府が大德寺、妙心寺法度といふ特別な法度を出したのは、何も紫野の佛法に對する五山側の對抗意識ばかりではないので、そこには朝廷の勢力を掣肘し奉らうとする幕府の政治的意圖のあつたことは云ふまでもない。つまり大德、妙心寺法度は崇傳のたくんだ一石二鳥であつたのである。この大權干犯は遂に後水尾天皇の御退位といふ朝廷の重大事件にまで發展して行つたことは、まことに恐懼に堪へぬ次第である。ところでこの大德寺住持資格たる「三十年綿密の工夫、千七百

則の話頭了畢」を文字通りに適用されることになると、十五人が失格するばかりでなく、將來永久に出世入院の有資格者はないことになる。本寺に住して一宗の教權を握る者がなくては紫野の佛法は立たなくなる。崇傳の陰謀は深刻であつた。ここでこれに太刀打する者がなければ、紫野の佛法は五山派に屈服して大德寺は滅びなければならない。ここに於いて澤庵和尚は敢然として立つたのである。そして大德寺、妙心寺法度に對する抗辯書を書いて逐條詳細に批評反駁し、特に第二條の「三十年綿密の工夫、千七百則の話頭了畢」に關しては最も痛烈にこれを辯駁し、その文字に拘泥して實情に迂き杓子定規たることを先づ論じ、千七百といふのは『景德傳燈錄』に載せてある祖師の數であつて本則の數ではなく、本則は九百六十三人分しか傳燈錄には載せてない。それを一口に千七百則といふのは大數を擧げたので、何も千七百則全部を通らねばならぬといふわけのものではない。一處通れば千處萬處一時に通るといふこともあるので、數に拘泥すべきものではないのである。三十年綿密の修行といふことも、實際上は困難なことで、また無意味でもある。參禪に三十年費したのでは五十過ぎねば長老にはなれぬではないか、それでは弟子を養成することも出來ず、化導のために働く年月も少くなるであらう。古德の例について見ても、二十代、三十代で修行を仕上げたのがいくらもあるので、これも數字に拘泥すべきものではない。と、まあさういふ意味のことを縷々陳述して、結局あの第二條は不可能を强ひるもので、無意味なものである、空文に等しいものであることを明白にした。これでは流石の崇傳の面目も丸つぶ

れであるが、面目をつぶされた崇傳は蔭の人で、表面に立つのは元和法度の發布者たる家康である。澤庵和尚は崇傳をやつつけて溜飲を下げたが、なんぞ圖らん、それは今は世に亡き東照權現に對して啖呵を切つたことになつたのである。

「權現樣の法度に對し異議を申し立てた事は、公儀を憚らぬ不屆の儀」といふことで、寛永六年八月二十五日附で出羽上ノ山に流罪とはなつたのである。崇傳はここでまた竹篦返しをした。これが傳長老の惡辣の手段であらう。

「傳長老と申す者、天魔外道に候」と、澤庵はその書翰の中に書いてゐるが、まことに傳長老は澤庵和尚の「天下を一變」させた天魔外道ではあつたのである。

羽州上ノ山の配所

「法の爲め先師の爲め、我と心より如此成り行き候身に、何の嘆あるべく候哉と存候」——これが流されて行く澤庵和尚の心境であつた。

出家は三界を家とする事勿論に候間、何とても悲しき事もなく候。武士の御國がへ同前と存候て居申候。御氣遣ひ候間敷候。御なげきも候間敷候。世をなげき身をかなしむは白地凡夫の上に候。（澤庵和尚全集卷四、六二頁）

別れを惜しみ、後を慕ふ人々に對してはかういつて諭し慰めた。そして途中白河まで、同じ罪

（抗辯書に署名加判した）によつて奥州の棚倉に流されて行く玉室和尚と同行し、詩歌の唱和に打ち興じつつ身に罪あるを忘れて羽州上ノ山の配所に赴き、土岐山城守頼行の屋敷に身を寄せた。その上ノ山に於ける城主山城守の厚遇の様子を、和尚はその書翰の中に書いてゐる。

山城守殿ねんごろさ、中々我等國もとにての馳走の樣なる事にてもなく、家中の侍衆までも殿の祖父などのやうに重々しくあしらひ、馳走大方ならず候。何にても不足なる事なく候。八木、炭薪、鹽噌何にても城よりたくさんにつぎ〳〵に被仰付、下々の着申す物まで冬夏ともに結構に念入候て被仰付候。其外方々の大名衆より色々の音信、去年八月初爰元へ參り候。茶などもはやつめたる壺五つ六つ參り候。金子などは十兩廿兩づつ給はり候へ共、皆々返し進申候。（同上、九〇頁）

金子ばかりではなく、「小袖なども帷子なども方々より數々」贈つて來たが、「我々入不申候故、參り候へば當座〳〵に皆々人に遣し候」といふ恬澹ぶりであつた。さういふ風であつたから、なるべく人から物を貰ふまいとして、「われ〳〵に何がな可給とゆめ〳〵思召候まじく候」と斷つた。金子や品物ばかりでなく、京、大坂、堺、江戸などの方々から、遙々尋ねて來る使などにも會はず、歸してしまふことが多かつた。

一人も音信とて人などくれ候はば、歸洛申候とも中たがひと申遣し候故、今日まで半兵方よりも人を越し不申候。（同上、八九頁）

といふ有樣で、弟の半兵衛との音信さへも斷つてしまつた。もつともこれは人々の往來を斷つたので書信の往復を斷つたのではなかつた。

此所一段よき所にて候。何にても事のかく事なく候。湯御座候て、下々まで日々冬夏とも入申候て、くつろぎ申す事にて候。居申す庵もわざと小さくと色々わび事いたし、かや葺にて候へ共、内をばきれいにいたし候て居申候。小者一人、出家一人にて下申候（中略）我等事は枯木のやうにして居申者にて候故、たべ物にも着物にも居所にもかまひ無之候間、何の苦、もなく候。（同上、九一頁）

この庵の榻間に「春雨」といふ自筆の扁額を掲げて、春雨の閑寂を樂しみつつ、ここに四とせの春秋を送つて、寛永九年に將軍秀忠の薨去により、赦されて江戸に歸つた。

それから後、晩年に至るまでの十年餘りの年月が、和尚の一生涯に於ける最も華やかな生活であつたが、その華やかな生活が、その人自身にとつては寧ろ苦しい迷惑な生活であつたのである。

紫野大德寺の大檀那であつた織田、豐臣が滅んで德川の起る天下一變を目前に見、その德川幕府の誕生の第一聲たる元和法度に楯をついて、その廉で流されの身となつた者が、事もあらうにその德川の將軍家に仕へねばならなくなつたといふのは、不思議な運命の皮肉である。幕府の帷幄にかくれて、ひそかに廻らした崇傳の奸策にかかつて配流の憂目を見た者が、時を異にし事情を異にしてゐるとはいふものの、それと同じやうな地位に坐らなければならなくなつたといふこ

とは、更に皮肉な運命ではある。澤庵和尚がこれを悦ばなかつたのは當然といはねばならない。和尚の最大の同情者である天海僧正や、またその俗弟子にして道交の最も深い柳生但馬守宗矩などの懇ろな勸めがあつたればこそ、德川三代將軍家光に謁見はしたものの、それさへ氣がすすまなかつたのである。しかるに、逢つて見ると將軍の和尚に對する芳情の數々はその心を動かさずには置かなかつた。特に家光が大德寺出世問題に關心を持ち、同情のある言葉を與へたことはひどく和尚を感激させた。

忝き儀に存事候。本寺の爲め六年身命をすてゝ居申候故、佛祖の心にも叶ひ申すか。當御所樣道理を分けさせられ、前々の如く被仰付候。天祐其外の長老衆、當寺の草木も色をなほし申す體に候。（同上、一三一頁）

これで和尚の心持はすつかり一變し、將軍家に厚意を持つやうになつた。「二之丸にて御能被仰付候。罷出見物可仕由御意にて、罷出候」といふやうに、それからは悦んで登城をするやうになつた。「朝日以前に參り候て、御能三番通しに」拜見することもあつた。食事の時分になると、「御振舞出申候。（中略）兩度までよく御酒共被下、ゆる〳〵と見物仕り候へとの御事にて、大炊殿膳の前へ御出にて、よく御酒たべ申せなどとて御念入候」といふ待遇ぶりであつた。これは寛永十三年の九月十三日のことであつたが、同月の十七日にはまた二の丸に召された。

十七日に二之丸へ召され候。常の御座にては候はで、御庭へ御出候て、大入籠の前御座敷御

座候。路地より入申候て、其御座へ參り候。八時分より日の入まで御前に只一人間二尺ほどをき申候て居申候。色々御不審共段々御尋ね候。一々御奏申候。殊の外御得心參り候。面白く思召すよし候て御機嫌よく、御茶共被下致退出候。（同上、一八八頁）

すると、六日おいて、その月の二十四日にまたお召だ。

又廿四日に召され候。初夜時分まで居申候。其時は御尋ねの事を大方過ぎて、但馬をも召し、兵法の事に付て、澤庵の前にて、わが存分を申して見よなどと御意にて、但馬申分共御座候。其次に加賀守をも召して、そちなどはちとそれへ出で申し、雜談共聞き申せと被仰候て、加賀殿も御前へ御伺候候ひし。（同上）

家光將軍を中心に御指南番の柳生但馬守と老中の堀田加賀守とが集つて、澤庵和尚に物を聞く會が開かれたわけである。ところで、折角話を聞いても多用にかまけて忘れるおそれがあるから、話のあらましを書いて來てくれといふ將軍家の依頼で、「廿四日以後は書物にかゝりて登城も不仕」「廿七日に一冊書き申して上げ候。殊外御滿足の由」であつたといふのである。また將軍から質問された事柄については、一々その解答を原稿にして持つて行つて說明するといふ近代的な方法を採つたのである。かくて將軍家への接近の度數は重なつて行つたが、もともとそれは望むところでなかつたので、「今一兩度も登城申候はば、御いとまの事を申上げ」ようと思つてゐた。併し、聞法に熱心な將軍の樣子を見るとさうもなり難く、「難儀」に「迷惑」に思ひつつもずる

ずると引きずられて行くより外に仕方がなかつた。

或る時などは話が法度事件から配流のことに及んで、其方が遠國に流された時は、どうぞして呼びかへしたいものだと、そればかり心にかけてゐた。それをよしみに思はぬ筈はなからう、と「いかにもこまやかに御意」あつたが、かう恩にきせられては「迷惑仕る」より外に仕方がなかつた。

寛永十四年の霜月十七日附で、故郷但馬の宗鏡寺六人に與へた長文の手紙は、將軍家の和尚に對する殊遇の様子を更に詳しく報じてゐる。

當月四日、又召候て登城申候處に、松平伊豆殿御意として被仰候は、澤庵は御道具共未だ見られず候間、御道具共見せさせらるべき爲に御茶可被下候間、路地へ參り候へ（中略）との事に候。即ち路地へ參り候へば、伊豆殿路地に御座候て御指南に候。石燈籠、行燈など路地の體不及申候。御座へ入り申候へば、床に虛堂（きだう）の墨跡（昔安國寺所持之ナリ）名譽の墨跡也。根本山崎の妙喜庵より出申候。四クダリ半サゲテ三クダリ、名印紙白、見事さ、中々虛堂には勿論、天下一の墨跡に候。御釜野溝釜、さて上様出で被成候て御意には、澤庵は道具共被見間敷間、見せん爲め茶をといふ事ぢや程に、近うよりて能く見られよ。手燭〳〵と御意にて御内へ入らせられ候。能々見申し、其後御振舞出（中略）さて中立仕候中、又出御候て、御花入させられ候。雅樂花入也。生駒雅樂頭被上候。御祕藏にて名を雅樂と申候。金之物也、御座へ入

り申候へば、又出御候て、御意には花を御自身入れさせられ候後に、炭をも可被成候。御茶久しく御煩ひにて不被成御失念も御座候間、佐久間將監に立てさせうずと御理（ことわり）を被仰にばかり出御候て、又内へ入らせられ候。御茶過ぎ候て出御候て御炭被成候。御炭殊外出來申御機嫌能く候。已上四度御出被成候。御茶入はならしはと申かたつき、是は秋月持申候。（中略）御水さしは烏帽子箱と申候。備前物に候名物にて候。御茶碗は織部持申候。わりかうだい高麗紫竹茶杓（三本之内之由候）御茶はすて子と申す御つぼの茶と伊豆殿被仰聞候。一々名物共さて〳〵可申様も無之事に候。（同上、二三八頁）

將軍家が由來づきの名物を揃へての茶のもてなしである。而も自身四度まで茶席へ臨んで茶事を行つてのあるじぶりである。而もこれは澤庵一人の爲めの催しである。參らざるを得ぬではないか。而してかういふ例は諸大名はもとより、天海僧正に對しても、三大納言達に對してすらも、曾て無いことであつたといふ。參らざるを得ぬではないか。

品川に一寺建立

その頃、澤庵和尚は麻布の柳生但馬守の下屋敷に假寓して居て、そこから登城して居つた。もとより江戸に永住する氣持はなく、機會さへあれば、但馬の出石に歸り住みたい考へを持つてゐた。その出石の入佐山の麓、宗鏡寺の裏には、嘗て營んだ投淵軒といふ庵が待つてゐた。投淵軒

といふ庵の名にも世を捨てた人としての和尚の氣持がうかがはれる。閑居隱遁の望みを常に抱いてゐる澤庵和尚に對して、或る時江戸定住の話を將軍家が持ち出した。

我等御返答には、拙者儀三十年近く世を捨て申し、山林之栖ひ仕候。今一兩年の餘命と存候間、此段御免被成候樣にと申上候。（同上、二七三頁）

さうはつきりと斷つたが、將軍家の方にもまた相當の理由はあつた。

御意には、本寺の爲をも法の爲をも深く思ふよし、連々被聞召候間、法の爲又は本寺のためにもか樣にして居申し、御前をも仕候はゞ惡くは有るまじ。（同上）

これは偏へに和尚のためを思へばこそである。佛法のため、本寺大德寺のためを思つての計らひである。まだ未解決のままである大德寺の出世入院問題の解決のためにもその方が都合がよいぞといはぬばかりの將軍の口吻である。しかし、これは決して和尚のためを思ふばかりではなかつた。將軍家の都合を云へば「但馬守の下屋敷の長屋の隅に」ゐる「何處の修行者とも不知體」の者を「密々に二之丸に召候事も外聞いかゞ」と思はれたからであつた。それであるから是非とも「寺をも被仰付、本丸へも罷出候樣に、面むきに候はねば不成事」なのであつた。そればかりではない。將軍家には更に一つの大切な目的があつた。

其の上諸宗諸寺の仕置をも成され度く思召し候。さ樣の事も御談合をも成され度く思召し候間、と御意に候。（同上、二七四頁）

これでは明らかに德川幕府の政治顧問である。金地院崇傳の二の舞である。何の因果ぞ！　天魔外道と嫌つた崇傳の地位に据ゑられようとは、まことに不思議な運命の八重だすきではないか。

そこで澤庵和尚は「江戸住宅の儀は御意に應じ」たが、政治顧問の方ははつきりと斷つた。

傳長老などの樣なる御奉公は、はや年過ぎ申候間、中々不罷成候間其段を御免被成候樣にと申上候。（同上、二七六頁）

さて江戸に常住するとしても大きな寺などを建てて貰つては、第一に人を幾人か置かねばならず、寺のことであつて見れば出家を置かねばならぬが、出家を俄に仕立てるわけには行かず、小僧からでは間に合はぬから、どこかお城近くに一寸した家を造つて貰つて、そこに一人で簡單に住むことにしたい、といふ旨を但馬守を以て申し出た處、將軍は御不興の體でお叱りがあつた。

但馬は合點の行かざる事を申す、それなれば今の我が長屋にても濟むは。わが物をも問ふとて、そのなりにては人の思ふ所もいかゞにて候故、か樣に御言を盡させられ候。せめて本の金地院が居なる程にもして置かねば、いかにしてもならぬ。澤庵の迷惑する所ばかりをいふて、我が爲の所をば申さぬ、とて御しかり被成候。（同上）

又しても、金地院が引合ひに出たが、將軍の意氣込みはなかなか大したものである。かくて、寛永十五年の四月一日に品川の新築の茶亭で茶會が行はれ、その席に和尚も召され、老中も列座にて、將軍家から品川に新寺を建立する旨の發表があつた。細川忠利に宛てた手紙の中に、その

事についてかう書いてゐる。

品川に於いて一寺建立被仰付候。か様の儀も老後餘命無く分別に能はざる儀に候へ共、異儀に及ばざる子細故、無是非候。（同上、二九〇頁）

その年、和尚は寺の出來上るまでの一年間、暇を貰つて旅に出た。京都にも行き、堺にも行つた。南宗寺では先師の三十三回忌を營み、大德寺では諸塔を巡拜した。仙洞に召されて、後水尾上皇の御前で『原人論』を御進講申上げたのもこの時である。國師號宣下の御沙汰を蒙つて、謹んで拜辭し、大德寺二世徹翁和尚に對し國師號の追贈を乞ひ奉り、御嘉納に預つたのもこの時である。

翌年四月、一年ぶりで江戸に歸ると、品川の新寺は立派に出來上つてゐた。新寺の候補名をいくつか選んで上覽に入れた中に「東海」といふのがあり、それが台意に適つて東海寺とは名づけられ、和尚は台命によつて五月十九日に入寺開堂した。

東海寺に住してからは、うちしきる將軍のお成りと、度々のお召と、來客の應接とで多忙な日が續いた。將軍、東海寺への初のお成りは寛永十六年五月九日の豫定であつた處、天氣の都合で十九日に延期になつた。五月九日、小出吉英に宛てた手紙はお成り前の模樣を報じてゐる。

御人々被下候て庭除き共候間、いつ御成候とても（中略）心安存候。御振舞以下も皆々あなたより代官衆被仕候間、私之氣遣は無之候。（同上、三三九頁）

同九月十五日附の書翰には「御成にて御機嫌能、終日及暮被成御座候」とあり、また十八年五月十九日附の書翰には「當寺へ御成にて殊外御機嫌能、永信州など御供、此邊寺々をも御徒歩にて御遊興候つる」とある。將軍のお成りも度々に及んだが、和尚の登城は一層頻繁であつた。

「又昨日も登城申候。雞鳴に歸寺仕候」とあるかと思ふと、「御前へ罷出候て夜半迄居申候」といふ有樣。時としては「十五日に御城へ召され候て、十五十六兩程迄御城に居申し、十七日に爰元へ罷歸」ることもあつた。それほど遲くまで、また連日に亙つて何の用があるのかといふと、

御茶湯、御花など被爲入、御茶被下、御相伴にて御會席被下、御歌共數首御座候。（中略）私にも十首被仰付、當座を仕候。（同上、三四九頁）

これでは夜の更けるのも仕方がない。夜更けて品川の寺まで歸るのは困難といふので、江戸に中寄を置くことになつた。

か様に深更などに成候ては、品川へ罷歸る事も成間敷候間、か様の時は江戸に宿所無之ては成間敷候間、烏丸居被申候所を申付候よし、中根殿へ被仰渡候。（同上）

さういふやうに將軍家の至れり盡せりの懇情であつたが、それが和尚には反つて迷惑なのであつた。「打續不得寸暇」「一日も心靜なる義無之、はたと迷惑致」すのであつた。この生活を述懷して、「出家道も皆々下りはて候て能事は一つも無御座候」と云ひ、また「つなぎ猿の樣に罷成致迷惑候。因果歴然の道理、人のトガに無御座事に候」とも云つてゐる。

この「つなぎ猿」の苦境を訴へつつも、それから脱することの出來ぬ澤庵和尚であつた。和尚の將軍に對する氣持は、將軍のそれに正比例してゐた。將軍家のことは常にその念頭を去らなかつた。諸侯へ便りの度毎に「公方樣彌御丈夫に被爲成」「公方樣一段御息災に被成御座萬人喜申候」と報ずることを忘れなかつた。またその厚遇に對しては「冥加おそろしき儀に御座候」「御念入りたる忝き次第共にて候」と書いてゐる。が、その「御懇に御座候程」「仕迷惑」のであつた。和尚が大病を患つた時の、將軍家の心遣ひは並み大抵ではなかつたが、その病氣についてもかう書いてゐる。

我等の病は御懇故にいでき申候。御懇なく候はゞ、いづかたへ成共次第に身をさせられ候はば、後の忝も不入して無病に成可申候。（同上、五一八頁）

和尚の望むのは閑居隱栖であつた。自由であつた。それが得られれば病などは無くなるといつてゐるのである。

一日も心靜なる義無之、はたと致迷惑候。連年閑居之志御座候。（同上、三六五頁）

その閑居の望を七年ぶりで達したのが、正保元年の但馬への旅であつた。三月九日に江戸を立つて先づ京都に立寄り、仙洞御所に上皇の御機嫌を奉伺し、四月に堺に入つて祥雲庵の室に落ちついた。その時の快適な氣持を小出吉英に報じてゐる。

昨晩庵室へ入申候。諸木深々と繁り申し、物靜さ、七年已來之閑けさ、今日一日に御座候。

庵室之體修補被仰付、疊已下無所殘皆々被仕置候。江戸、道中、京堺此中の苦勞も今日一日にて相忘申す事に候。萬事御念入候段、書中に難申盡儀に候。（同上、五八七頁）

すつかり解放されて、樂々とした氣分を味はつてはゐるが、ここにも將軍家の恩惠の絆は延びて來て、和尚の身邊を取卷いてゐるのである。庵室の修理、疊替が幕府の手によつて萬事念入に行はれてゐるではないか。それのみならず、「庵室のあたりには夜番被仰付候」とあつて、幕府の護衛がつけられてゐるではないか。將軍家からは九月頃までといふ期限附の暇が出てゐる上に、更に書面を以て期限内に間違ひなく歸るやうにとの催促が來てゐるのである。

先日御内書參り候。江戸にて御意なされ候如く、九月時分早々罷下る可き旨に候。庵室一段靜に御座候て江戸の事忘却申候へば、又御内書の文言見申候へば、驚樣に罷成候（同上、五八七頁）

やれやれと寛いだ氣持になつてゐるところへ持つて來て、すぐにこのお達しである。折角の閑居の味も興さめざるを得ないではないか。

六月二十二日堺を立つて但馬に赴き、鄉里出石の入佐山の投淵軒に籠つて同行の天祐を相手に讀書と執筆とに日を送つた。和尚が原稿を書き上げると側から天祐がそれを淨寫した。二人が机を並べて終日物を書いてゐるのを、弟の半兵衛が見て、休養に來てゐるといふのに、何でその樣に忙しくしてゐるのかと云つて笑つたりした。これが何よりの休養なのであるのに。

終日物を書き申て居申候。半兵など參りては、たまたま休息するとて、何を一日書き申すぞとて笑ひ申候。此心靜にして書中見申候事ならず候て、世事になやまさるゝを、此靜なる所にてよみ書き仕候が休息にて候とは、凡夫心から不存候故、參りては半兵衞笑止がり申候。

（同上、六一〇頁）

そして日々米二合と「小サキキリ艾一つ」それに椎茸、海苔などいふ簡單食に甘んじてゐた。もつとも「其外隨分ふせぎ申候へ共、筑紫遠國より飛脚に持せ」て物を送つて來たりもした。かくて約半年この但馬に滯留し、豫定の期限を過ぐること二た月餘り經て、その年の十一月七日に江戸に歸つた。そしてその翌年の十二月十一日東海寺に於いて遷化したのである。

迷惑と苦勞とに終つた澤庵和尚の江戸生活の中で唯一のうれしかつたことは、多年の懸案であつた大德寺出世問題が、寛永十八年に家光將軍の厚意によつて目出度く解決したことであつた。澤庵和尚はその事を先づ、大德寺の外護者にして和尚の歸依者である關白近衞信尋に報ずるために、その家職の西洞院時良に手紙を書いた。

大德寺邊之儀無相違、以先規可致入院開堂之旨被仰出候。先以大慶此事候。無相違以叡慮可□萬規之段、本山之悅此節御座候。此等之趣被仰上可被下候。恐々謹言。

次ぎに南宗寺の弘公首座にこの事を報じた。

大德寺之儀、首尾能相濟、年來之苦み、苦んで其功ある樣に存じ令滿足候（中略）妙心も烏

曇花に存ぜられ悅び被申候。先々愚老一世之滿足此事に候。此れ已後は一死を待つ計にて候。

（同上、四三二頁）

第三にこの事を小出吉英に報じた。

今度大德寺の事仰出の儀、御禮申上候處に、澤庵存分のまゝに云ひ付けたほどに不足は有るまいと御諚にて、一段常より御挨拶能候故安堵仕候。堀田賀州、柳生但馬、私兩三人にて候。兩人も被取成樣子能く御座候。大德寺之儀相濟、一代之際明き申候。（同上、四三八頁）

「澤庵存分のまゝ云ひ付けたほどに不足はあるまい」と將軍もほがらかである。「一代の際明き申候」――一生の仕事はこれで終つた！　これで重荷をおろした！　と澤庵もほがらかである。

高邁な知性と豐富な趣味

われらは以上に於いて澤庵和尚の書翰を通してその生活を見て來たが、その思想を窺ふに當つても同じ方法に依りたいと思ふ。もとより個人の思想を知るには、その作物なり著述なりに據るのが本道で、澤庵和尚の場合も同樣であるが、書翰といふものが一個人の生活を知る好個の資料であるのみならず、その思想を知る上にも重要な資料であることは云ふまでもない。澤庵和尚の場合には特にその感が深いのである。

澤庵和尚の書翰は細川侯爵家藏版の『澤庵和尚全集』第四卷に三百六十四篇收載されてゐる。

年代は元和元年から正保二年まで、即ち元和偃武から和尚の晩年に至るまでのものである。その中、細川忠利に贈つたものが四十五通、細川光尚に贈つたものが八十五通、小出吉英に贈つたものが最も多くて二百一通、柳生宗矩に贈つたものが十五通、近衞關白信尋及びその家職に宛てたものが十二通ある。

澤庵和尚の書翰は赤裸々な生活の記錄であると共に、その廣くして深い學問思想の斷片的、電光的表現である。それは法然や親鸞や日蓮や白隱に見るやうな法語を主とした書翰ではなくして單なる日用往來の文であり、起居動靜を報じた尋常茶飯の手紙であるが、その間に暗示に富んだ教訓もあり、時代に對する鋭い批評もあり、高邁な知性のひらめきも見えるのである。そこには斷片的ではあるが、天地人生、政治經濟、詩歌文章、醫藥養生、趣味藝術等に關する論說意見なども見えてゐて、多岐多端な內容を持つてゐるのである。

その書翰のあるところでは、『日本書紀』の天地開闢說を論じて、天地開闢とは天地が鷄卵のやうなものから二つに割れて出來たといふことではなく、聖人が世に現れて天理を明らめ、地義を究め、人事を製作し、父子婚姻の禮法の備はつたことをいふのである。また混沌未分といふことも、天理を知らず、地義を辨へることなく、三綱五常が行はれず、耕桑の業が興らず、混々然沌々然たる未開蒙昧の時をいふのである、と我が天地開闢の神話を儒教式に解釋してゐる。

天地一身と合符せり。天地の理を知らずして何ぞ一身の天地を開闢せん哉。此身ありと雖も

三才に達せずんば、混々然として未分の時の人間也。（同上、一三六頁）

と云ひ、また、

道は萬端に通ずる事に候。天地の事を一身につめ候物にて候間、天地の事不明に候はゞ一身の始終も明め難く候。殊に醫陰兩道此事專用に候。（同上）

ともいひ、天地廣大であるが一身と合符し、微細なる蚊虻蟻蟻の如きものも又一身と合符し、非情草木もまた此の如しと說いて、佛敎の天地同根萬物一體の說に結びつけてゐる。

小出吉英へ與へて政道の要を說いた手紙の中には、少し位惡い事をした者があつても許して見遁してやるがよい。またよい事をした者には扇の一本も與へ褒美の言葉をかけてやるがよい。さうすれば惡人は二度と惡事を働かぬやうになるであらう。惡い者を叱つてばかり居り、善い者を褒めることをしなければ、惡いものは自暴自棄になり、善い者は張合ひなく、改惡遷善の實をあげることが出來ぬであらう、と述べてゐる。

細川光尚に對しても同樣に、罪人を赦すことが國にとつての第一の祈禱である、と訓へてゐる。

御入國の御祝儀又御祈禱と思召て、牢ばらひなどさせられ候はゞ一國の者あつと申候て悅可申候。御國の御祈禱には類もなき御事たるべく候。（同上、四五三頁）

親類歩き、酒宴沙汰を取止めて、自重謹愼せよ。邊りの者に氣をゆるし、油斷があつてはならぬ。時々は家來を呼んで饗應せよ、しかし餘り甘やかしてはならぬ、とも訓へてゐる。

また、奉公の道を説いては「人の臣たる者、只一筋に主をあがめ、忠心一ばかりを心懸け」ねばならぬと云ひ、忠の德を説いては、

忠臣と言は、凡そ臣たる者はとに角にも身を忘れて、主の御爲能き樣に〳〵と存、是は忠にて候。此忠心あらん者、終に身が立たぬは無之候。（同上、二〇六頁）

と云つてゐる。その他寺院經濟のことについても詳しく書いてゐるが、これは現代と事情が異なるからここには省略する。

詩歌文章に關する意見は隨所に散見してゐる。正保元年に、但馬から泉州岸和田の小出吉英に與へた長文の書翰の中には、木下長嘯子の文章の難解なこと批評して、『源氏物語』を讀んでも、所々に解らぬ點はあつても大體の意味はとれる、その他の物語でも、古今集の貫之の序でも大體の意味は解つて所々に難解な點があるに過ぎない、然るに長嘯子の文章となると古い語ばかりを集めて書いてあるから「よみても一圓合點不參」「かたはし皆知れぬことばかり」で、恰も多くの書物の中からむづかしい言語を選り拔いて置いて、それを寄せ集めて書いたといふ趣である、かういふのは物知りを衒ふといふもので、文章道からいふと極く初心といはねばならない、古の名文といふものを見ると歌の序文でも物語でもむづかしくて讀み得ないといふことはない、文章は平易な語を用ゐて分り易く書くのでなくてはならない、と論じてゐる。また和歌については、

心に會得する所なく候て、すがたばかりをつとめ候へば、木人の裝束きたるやうにて心の感

無御座候。（中略）心の感もなくして衣裳のさまばかりよからんよりは、言葉ありのまゝにて心の深きは却てまし可申哉。（中略）すがたのみ〳〵と心懸候へば、きゝよくも候へ共、その人の心に實ありていへるはかはる所あるべく候哉。（同上、六一四頁）

と、實感實境に卽したありのまま歌を主張し、心にもないことを美しくつくりなしたいつはり歌を排斥してゐる。前の文章明瞭論といひ、この和歌のありのまま論、實感論といひ、いづれも現代の新しい文章論、詩歌論と一致する說であつて、此の時代としては卓見といはねばならない。

また、連歌、俳諧についても書いてゐる。

柳但州へ同く吉祥寺、城雲檢校兩人よび候て終日語り申候。城雲に俳諧發句、吉祥寺望候て、發句被申候。何共脇仕りかね申候。俳諧は前句がらの物と見へ申候。律義なる人、じやれごと云ひかけられぬと同じ事と見へ申候。常の連歌ことばにても、心が俳諧に參り候句は、付句もひかれて參ると見へ候。俳諧とても心が律義に候へばたゞ言葉にて連歌仕り候樣に參り候。土民が物申候とても言葉はたゞことばにても、心が律義に御座候へば、おどけごとにては無之候。可然人の申さるゝ言葉はうつくしきやしやなる言葉見被申候へ共、じやれことばにて一通り御座候ごとく、まづ〳〵常の連歌ことばにても俳諧底は御座候と申すに候。（同上、三二八〇頁）

俳諧は前句次第のもので、眞面目な男に洒落の云へぬやうに、前句に裃を着られると付句が氣

輕にすらりと出て來ない。俳諧でないただの連歌でも前句に滑稽味があると、ついつり込まれて付句も俳諧になる。俳諧の連歌でも、俳味が出てゐないと普通の連歌と變りはない。普通の連歌にも俳諧ぶりがあるやうに、俳諧にもただごとがある、といふのであらう。實際に連歌、俳諧を作つたものでなければ云へない面白い連歌俳諧相關論である。

澤庵和尚は、醫學にも造詣が深く鍼術にも達してゐた。その事は『醫說』といふ著述にも見えて居り、書翰の中にも散見してゐる。澤庵和尚が醫學に興味を持つたことは、その科學的頭腦によるものであるが、一つはその環境の影響もあつたことと思ふ。前にも述べた通り、堺には半井道三、阿佐井野宗瑞らのやうな名醫が出で、半井家は代々名醫の家柄で、道三以來堺に定住してゐた。堺がさういふ土地柄であつたので、そこに長く住んでゐた澤庵和尚も醫學に興味を持つやうになつたものと考へられる。また和尚自身が比較的病弱であつたといふことも醫療に關心を持つ原因となつたかも知れぬ。「澤庵和尚ねあせの事の狀」と端書のある寢汗の治療を說いた一書が細川侯爵家に傳はつてゐるが、その中に「愚病者に候故、自汗盜汗も連々身に覺え候故如此申候」とあつて、和尚自身寢汗の經驗あることを述べてゐる。寛永十四年細川忠利に宛てた手紙には は(ばれもの)を自分で治したその療治法を委しく書き送つてゐる。醫療に關聯して養生訓のやうなものも書翰の隨所に見えてゐる。

細川忠利に宛てて、養生の必要を說いた手紙の中に、將軍家の病後の攝生ぶりを褒めた一節が

ある。

御養生專用に存候。大樹の御養生中々大方の者の成る事にては無之候。今に御酒一滴も參らず、御食物のあてがひ魚物も朝晝は毒ならぬものを、醫者衆の書立の外は參らず、晩食は御精進にて候。灸も當年はや千二三百も被成候。きとくにて候。大人は別して御養生入る事に候。常に御養生肝要にて候。（同上、二八九頁）

忠利が歿して、その後目を繼いだ細川光尚に對しても養生を說いてゐる。

御養生よく被成、御達者に候はねば御奉公も不成事に候。御養生といつば御食物むさと不被成、過ぎ申さざる事第一也。

又一道の御養生、御年若く候間にむさと候へば、血氣破れ候て大病出で申候。

右の二專用の御事にて候。（同上、四五三頁）

澤庵和尚は一面に於いて科學的才能を有つてゐたと同時に、一面に於いてまた趣味の人でもあつた。書畫に巧みで、詩歌、文章、連歌、俳諧にも堪能であり、茶湯に好き能に好き、謠曲『熟海』の創作さへもあつた。細川光尚が先考忠利の菩提のために、熊本に妙解寺といふ新寺を建立し、澤庵和尚を開祖とし、その額を和尚に依賴した。和尚は悅んで引受けた上に、額の彫刻に就いて細かい注意を書いて送つてゐるが、そこに和尚の神經質な一面がよく出てゐる。

御建立の御寺の山號の額、其地に於て細工人多可有御座候間、堀申事可被仰付候へ共、か樣

の大字は紙に書き申候を細工人が板に寫し申候へば、筆法又筆のうへしたなど相違申候。直にぬり板に朱にて打付書にて、此筆は下にある筆、是は墨の上を重ねて引きたる筆などと直ちに不申付候へば、文字散々に成申候。殊に此の彫り申す細工人は文字を彫り申す事、字の心をよく合點仕たる者にて、爰元にて當寺の額共愚老書き申候物彫付申候間、此方より額物様の恰合皆々此者に申付、當寺に留め置き候て自由に大方彫申候てから、細々見申候て申付候はずば成間敷存候て右の通に申付候。（同上、五二三頁）

紙に書いたものを板に張付けて彫つたのでは筆勢が出ないし、また熟練した彫刻師でなくては立派に仕上らないから、こちらで頼みつけの者に彫らせることにした、といふのである。そしてそれを仕上げて發送することを報じた手紙には、

乍病中額二、棟札、鐘の銘皆々相調へ下し申候。（中略）寺の表には方丈と申す額大方打ち申候。又定たる法にも無御座候。如何様にも可有之候間、誰も見申ても卽ち寺號存候に寺號の額可然と存候て妙解寺と書き申候。妙の字の扁を玄の字に書き申候は女の字を忌む心にて候。（同上）

と、ここにも神經質な潔癖さを見せてゐる。またその妙解寺の門前に石燈籠を建て連ねることの可否を問はれたのに對しての答へには、「燈籠を五十百左右に立ち並べ、宮社大明神などの樣にするのは「おごりのやうに見えて」よろしくない。さうするより墓所に樹木を植ゑ繁らして、

その木蔭に「あそこここに燈籠などおかれ」たならば目立たなくもあり、風情も添つてよからうと云つてゐる。どう見ても趣味家の言としか思へない。

澤庵和尙は寛永十八年に大病を煩つて熱海に四十日間も湯治してゐた事があつた。その間は讀書と執筆とに日を送り、『熱海』といふ謠曲を一番創作した。この事を細川忠利に報じてゐる。

灸針樣々致養生候間、別儀御座有間敷候。氣分は如常心かろく御座候。心の隙さへ御座候へば書を見申し、せゝり書きなど仕り、常の如くに候。是は又一つの持病にて御座候。殊に當地にて熱海と申す謠一番作り申候。節、章句皆々出來申候。（同上、三九三頁）

讀書、執筆、創作に興味を持つた澤庵和尙は、また學問、藝術の士でもあつた。

庵に入申候へば、又物の本共取みだし、私坐する程より外はあき所も無御座樣に取亂し申候て居候間、是を又仕舞申にも殊の外苦勞に成申候。（同上、三二三頁）

ともあるやうに、古書堆裏に埋まつて讀書執筆を樂しむ和尙であつた。そして專門の佛法の方については寧ろ冷淡であつた。

愚老式は心にも合不申時代にて候へば、何程上樣の御懇の儀は忝き儀とは存知候へ共、それにつき候ても、佛法を行ひ可申と存ずる心は毛頭胸より出不申候。大德寺派の作法を立て此寺を持ち可申と申す心は一圓無御座候。（中略）俗人衣袈裟を身にまとひたる分にて當年の中中と死期を待計にて居申候。（同上、六二九頁）

大徳寺派の作法を立てるとは、東海寺を叢林とし、修禪の專門道場とすることであるが、さういふ事はしないといふのである。和尚をかういふ心境に導いたのは、主として當時の佛教界墮落の弊風であつた。

今末世に罷成出家榮耀に御座候。私底の心とは雪墨の縁に御座候間、人々氣には入不申候へ共、又こなたの氣にも逢不申候間、別と存候て居申候。（同上）

また、但馬に歸休中、地方の僧侶の狀態を見てはかう書いてゐる。

爰元の隨分の出家は、終日朝晩迄も碁にて被慰候由申候。（中略）一くだりなりとも佛祖の言句を見度事に候。碁など打申候てくらし可申候は無道心の事に候。（中略）さりながら佛祖の道難有面白き事が心に不落候故、書物よりも碁がまして面白き故にて候。（中略）又物の本を見不申にも、目があき申さぬは一圓別にて候。終日可仕事も無之、世事ばかりを仕候て居申候。（中略）紫野には昔は碁盤を被見付庫裏の釜前へ取出し、住持見て居て打破らせ、直に釜の下へくべさせられ候程、法度つよに候へ共、若衆など碁など打申衆も有之由申、かゝ樣に成可申候へば何共不成儀に候。（同上、六一〇頁）

碁打法度の紫野大徳寺に於いてさへ、その法度がゆるんで來たといふのだから仕方がない。

宗門の徒弟教育なども實にめちやで、晃首座の弟子の十一になる喝食（かつじき）に何を讀むかと問ふと、『大慧書』を讀むといふ。また、喝首座の小僧に問ふと『四部錄』を習ふといふ。萬事がこの調

子で「タケ過ぎたる事」分不相應の程度の高いものを子供に教へて、それでよい氣になつてゐる。沙彌、喝食のやうな少年の學ぶものとしては「先づ唐詩、中興詩、古文、毛（マヽ）求、千字文」など、やや進んだところで山谷、東坡を教へるといふのが叢林の慣例といふものである。それを解りもしないのに、『大慧書』だ、『證道歌』だ、『十牛圖』だと、やたらに高尚なものばかりを教へようとするのは何といふ心得違ひか。

誰をかも知る人にせんにて候、我が知人は一人も世に無之候。（同上、六二二頁）

と嘆じてゐる。沙彌、喝食の教育方法が間違つてゐるのみならず、宗門の最高位を占める智識、長老といはれる人に、これはといふ人のない世の中ではある。

今の世は智識、長老と申ても實の人きれ物にて御座候。（中略）何れの智識が實のこころ持被申候哉。只渡世一道と見へ申候。（同上）

かういふ世の中であつたから、澤庵和尚は佛法を行ふ心持になれなかつたのであらう。自分がその氣だから、その法を弟子に嗣がせる意志もなかつた。後水尾上皇からも、將軍からも嗣法の弟子を定めるやうにとの勅諭、上意を蒙つたにも拘らず、遂に兒孫を殘さなかつた所以である。一絲和尚に嗣法の意志があつたにも拘らず、これにも許さなかつた所以である。

末世之法三十年前に見限り候間、相續之事も不思、寺の事次て何と可成と云ふ事不存、（中略）我は我也にて候。（同上、四二二頁）

かういふ譯で、結局「紫野の佛法、今の世には用に立ち不申候」といふところに落ちて行つたのである。

尼になりたい女

初秋のある日のことである。禪庵に一人の未知の女性が訪れた。斷髪洋裝にして手鞄を持つてゐる。來意を問ふに、著述によつて名を知つて來たのだが、尼になりたいと思ふ、よろしくたのむといふ。斷髪洋裝が尼になりたいとは、いかさま小說の好材料でなければならぬ。しかし今予は貧文學として彼女に對してゐるのでなく、一個の貧道人として彼女のまへにゐるのであるから、あまり想像の翼翅をひろげるわけにはゆかぬ。が一應その事情をたづねてみた。答へはすこぶる簡單で、ただ日夕經を誦して佛につかへたいがためとのこと。それならば何も尼にならなくとも、優婆夷として佛の道に入ることも出來るではないかといふと、いやどうしても尼になりたい、何處かしかるべき尼寺を紹介して欲しいといふ。中年にして尼の生活に入ることの困難なことなど、一二の例をあげて話してみたが、いつかな思ひとどまる氣色もない。親兄弟に相談の上かたづねると、まだ相談はしないが、異存はないはずといふ。青春をすてても惜しくないかと聞くと、

それも覺悟の上だといふ。一體どういふ理由でさうまで思ひつめたのかと突込んで行くと、默して答へない。そしてすすり泣いてゐる。それほど尼になりたいといふなら、紹介すべき尼寺がないこともないが、と云つて私はある理想的な尼寺の話をした。

洛西の泉谷といふところに西壽寺といふ淨土宗で律を兼修してゐる尼寺がある。御室の仁和寺の山つづきを鳴瀧にでて、山一つ越えると石磴ゆるやかに登りつめた奥に、草葺の屋根高く聳えた御堂があり、それに並んで庫裡衆寮が建ち連なり、そこには常に十數人の若き尼衆が念佛を修しつつ、法悅にみちた如法の生活をしてゐる。戒律きびしき寺のこととて衣は綿衣の外を用ゐず、食は絕對の菜食を守り、男子禁制は無論である。一人の老尼が師と仰がれて尼衆を董し、完全なる統制のもとに畑も作れば薪も採る、托鉢もすれば棚經にも歩く。衣服も白木綿を買つて墨と何とやらの粉とを混ぜたものでねずみ色に染める。いはゆる墨染である。かうした自給自足の生活をいとなみ、粗食でよく働き、俗塵をはなれて信仰に生きてゐるので皆快活でいきいきと元氣がよい。若い尼衆は毎日知恩院の尼衆校に通ひ、點茶の稽古もし、お花の稽古もし、學問知識の向上に志し、その上、信仰にはひた向きに進んでゆく。

私は曾て知人の紹介でこの寺を二度訪ねた事がある。男子禁制といつても客はこの限りでない。一度はある年の春、御室の花を見ての歸りに、京の友と二人でこの寺をおとづれ、谷間ひの開けた末に西山を見はるかす一室に、院主の智山老尼と對談し、若き尼僧のもてなす淨齋に京の山寺

の味を心ゆくまで味はつたことがあつた。

この尼寺を知つてゐたので、今この尼僧志願の斷髪洋裝嬢に對しても深く苦慮する必要がなかつた。私はこの尼寺のことを語り、先づここなら日本一の尼寺といへるであらうと敎へてやつた。しかし、なるべくなら尼になどならぬ方がよいし、若しなるにしてもよく考へた上にした方がよからうと注意した。

彼女はおとなしくいふことを聞いて歸つたが、たうとう姓名も名乘らず、家は荒川區にあるといつただけで明かには告げなかつた。こちらも强ひて聞くことはしなかつた。ただ丸の內の××銀行に勤めてゐるといふことだけ漏らした。

その後、しばらくして、忘れたころに匿名の女文字の手紙が屆いた。それには、いろいろ考へたが、尼になるのは思ひ止まつた、と書いてあつた。

私はその手紙を見てホツとした。

十二月八日感激の放送

昭和十六年十二月八日！　この日、私は午前六時四十分から、「武士道の話」の第二回目を承

つて、澤庵の『不動智神妙錄』を二回に亙つて放送することになつた。昭和十四年の十一月二十七日から四日間「澤庵の生涯とその思想」を放送してから二度目の放送である。私はこの放送の交渉をうけた時、先づ思ひ出したのは、今は亡き母のことであつた。前回の放送を喜んで聞いて呉れた母に、今度のは聞かせることが出來ない、さう思ふと悲しかつた。去る十一月二十九日に放送の交渉をうけ、用意を調へて待つてゐると十二月八日は來た。臘八の朝！　成道會の日だ。四時に起きて讀經、開祖澤庵和尙の眞前に燒香禮拜、放送の報告をなし、握り飯と澤庵漬で簡單に朝食を濟ませ、五時半に庵を出て、省線で新橋に行き、途歩で放送協會に到着したのは六時二十分であつた。

協會に行くと、係りの人が出て來て、今日は重大發表がありますよ、といふ。いよいよ開戰だなと思つて、控室で時の來るのを待ち、定刻五分前、アナウンサーに導かれてスタヂオに入る。例によつて、落ちついた氣持でマイクロホンの前に腰をかける。二分、一分、五秒、一秒……定刻六時四十分！　アナウンサーの紹介を待つて、徐ろに口を開く。靜かに落ちついて、しかしながら情熱を籠めて一語一語說きすすむ。先づ禪と武士道との關係を說いた。生と死との一如を說いた。軍の時には軍に成り切る、それが佛法であると說いた。無念になつて戰へば人を殺しても罪にならぬと說いた。自己無ければ天地自己ならざるなしとも說いた。澤庵の語を引き、臨濟の語を借り、明極の語を引いて說いた——好調子に述べ去り說き來つて、所用時間十九分を一分半

ほど餘して放送を終へた。

スタヂオを出ると、別室から「帝國陸海軍は西太平洋に於いて米英兩國と交戰狀態に入れり」といふアナウンサーの聲がする。ニュースの豫唱をしてゐるのである。控室に戻つてお茶を飲んでゐると七時の臨時ニュースは米英に對する開戰の第一報を報じた。待ちに待つた開戰の日が來たのだ。さるにても何たる幸運ぞ、この意義深き開戰發表の直前に軍國佛敎たる澤庵の『不動智神妙錄』を放送したとは。ああ我れながら思ひ出深き感激の放送ではあつた。

禪庵の正月

新年には禪庵の一室に虎の雙幅を掛けることにしてゐる。私は寅年なので、それに因むこころもある。畫は狩野榮川の筆で安永乙未春正月九日と記してある。この日附を入れたところを見ると、これは榮川がその年の正月にこの禪庵を訪ね、その席上で畫いたものではないかと思ふ。無背景の墨畫の大幅で、兩虎相對して嘯く雄姿は豪快である。年久しく紙魚に委してぼろぼろになつてゐたのを近年修補したものである。また他の一室の壁には密畫の孔雀明王を中尊として、左右に十六羅漢の墨畫を配し、正面に寛永寺傳來の梨地八足卓を据ゑ、六器をならべ、金剛杵と金

鬧鈴とを置き、密壇のこころをあらはした。十六羅漢の對幅は、雪舟の原圖を探昇の寫したもの、函書によれば昔禪庵に雪舟筆の釋迦、羅漢、三幅對があつたが、故あつて他に渡し、その代りに模寫して殘したものが、この探昇寫の三幅であるとのこと（釋迦の幅は別に藏してある）。探昇は幕末の畫家で、故高橋是清翁の實父とか聞いてをる。雪舟の筆意が巧みに寫されてゐる。

中央の佛間には經案を置き、ここで正月三箇日、般若の理趣分を讀む。經中に幾度も繰り返される「空寂清淨」の句が心にのこる。空寂清淨は直ちに降伏大魔であるから、この一句でこの經の意は盡くされてゐると見てもよからう。また、この一句に徹することが佛道の所詮であるともいへよう。

理趣分を考へる

元旦に理趣分を讀んで考へた。印度人はまあ、なんと馬鹿丁寧な、まはりくどく、しちくどい表現をするのだらう。支那の譯經家はよくもまた、それを丹念に馬鹿正直に、譯出したもんだ。これは理趣分に限つたことではない。大般若經六百卷全部がこの調子だといふことだ。（全部讀んで見ないから知らないが）大般若經のみならず、一切經が悉くさうだらう。だから五千餘卷な

んといふ大部になつてしまふんだ。理趣分なんか、「空寂清淨」の一語、「一切法無戯論」の一語だけでもいいぢやないか。それをああいふ風に、詳悉式、反覆式、列擧式、蔓衍式に表現するところに、印度人の言表法の特色が見られ、同時にサンスクリットの特色も、印度人の民族的特色も親はれるのである。支那人はああしちくどい言ひ方はしない。論語を見ても、孟子を見ても解るやうに頗る簡潔だ。簡潔が漢文の特色といつてよいくらゐに手短かに云つてのけるのが支那人だ。禪の語錄にはその趣がよくあらはれてゐる。同じく漢文で書いてあつても經文になると、原典の飜譯だけに理趣分に見るやうな、詳悉、反覆の印度式修辭法があざやかにあらはれてゐるのである。

日本人は島國そだちで氣が短いためか、なるべく手短かに、手取り早く要領を得たがる國民である。「一口に云へば」とか、「一言以てこれを覆へば」とか、「掻いつまんで云つてみると」とか、さういふやうなことをよく言ひたがる。なかなか物ごとはさう簡單に一口で云へるものではない。複雜な人生の問題や宗教の問題など、一言で覆はれたりなどしてはたまるものではない。況んや宇宙の大眞理が、掻いつまんだくらゐで解る筈のものでない。にも拘らず、ともすれば一口に云ひたがり、また言はせたがる。それが日本人の一種の國民性である。この國民性が宗教の上にあらはれると、「南無阿彌陀佛」となり、「南無妙法蓮華經」となる。念佛と題目は、佛教を一口に言ひ表はしたもので日本佛教はつまり日本の國民性のあらはれであるといへる。

禪庵十年

苦難の十年

近ごろ寺院及び僧侶といふものが排佛思想の矢面にたつていろいろの意味で注目の的となつて來てゐます。それといふのもつまりは寺院といふものが從來の傳統によつて一種の特權階級的な取扱ひをうけ、そしてまたその寺院といふものが概して裕福で、從つてその寺院に住む僧侶が有閑的有產的存在と見做され、さてこそ、この非常時局に於いていろいろの批評をうけるやうになつたのであらうと思ひます。

しかし、寺院と云つたところで、ピンから切りまであるので、それは世間の事情と大差なく、持てる寺もあり、持たざる寺もあり、持てる寺も多いが持たざる寺も多いわけです。その持たざる寺の中には持たざるどころか赤字の寺もありませうが、その赤字を赤字とせず、住職自身が働いて稼いで、どうにか帳尻を合せてゐる寺が、ここに一軒あります。それが、お恥しいながら我が禪庵なのです。赤字といつても程度がありますが、我が禪庵などは、赤字を通り越して寺その

ものの力では維持して行けぬ寺です。こんな恥をお話したくはありませんが、新しく制定された宗教團體法によると、維持の出來ぬ寺はどんどんつぶして行く方針であるかに聞いてをります。さうなると先づ第一にその槍玉にあがるのは、我が禪庵といふことにならざるを得ぬだらうと思ひます。

また寺といふものは、皆相當にあり餘つてゐて、住職が勝手に使ふ處れがあるから、今後は寺の收入の中から住職及びその寺族の生活費だけを差引いて他は法人たる寺院の所有にするといふ宗團法の精神に照し合はして、我が禪庵などの場合はどういふことになるかといふことも考へて見たく思つて恥をしのんで書くことにします。いはば禪庵の打ちあけ話です。以前なにがしの博士が『貧乏物語』といふものを書いて評判を博したことがありましたが、禪庵の打ち明け話はつまり貧乏寺物語といふことになります。貧乏もこれを客觀視し、ゆとりを持つて寫し出せば、さほどいやしくもなく氣障でもなくなるかと思ひ、思ひ切つて書くことにしました。辛抱して聞いて下さい。

わが父のこと

庵――といふと芭蕉翁か良寛さんでも住みさうな草の庵を思ひ浮べるでありませうが、我が禪庵は小さいながら一軒の所謂寺院でありますから、檀家もあり、墓地もあり、位牌も置いてあり

ます。新體制の佛教の一つの方針として、庵とか院とかいふ稱號を廢して、すべて寺に統一しようとする案もあるかに聞いて居ります。それはどちらでもいいでせうが、庵と稱するにはそれだけの理由もあることで、歴史性を無視しての劃一主義はどうかと思ひます。ところで、我が禪庵はその檀家といふのが少いのです。檀家は少くとも寺に不動産としての土地さへあれば、今日ではもうそれで十分なのですが、私の寺にはそれさへないのです。

私の寺は、今から三百年前、澤庵和尚が配所羽前の上ノ山に於いて結んだ庵――春雨庵をその當時、上ノ山の城主であつたT侯が現在の地に移したもので、檀家といふのは、そのTといふ大名とその藩士のものだけなのです。その後、近年になつて若干の新しい檀家も加はりましたが、その數はいふに足りません。禪宗には、かうした大名の建てた寺が多く、大きな寺になると、數軒の大名を檀家に持つてゐるやうなのもありますが、私の寺のやうに、ただ一軒の大名によつて維持されて來た寺は、その大名の向背がただちに寺の運命に關するわけになります。明治維新の廢佛毀釋の嵐は、このささやかな私の寺をも見逃しませんでした。辛うじて廢寺の運命は免れましたけれども、大檀家たるT家の寺に對する支持は昔日のごとくではなくなつて、辛うじてつぶれぬといふ程度のあはれな狀態になりました。

丁度さういふ際に、それは明治の初年のことでしたが、一介の雲水であつた私の父は、名古屋德源寺の僧堂の修行を心ならずも中途で切り上げて、受業寺たる美濃郡上(ぐじやう)の慈恩寺に歸らなけれ

ばならなくなつたその機會に、序でながら東京見物を思ひ立つて尾張から上京して來たのでした。そして投宿したのが赤坂の種德寺で、そこにゐて寺の用など手傳ひながら東京見物してゐる中に、住職の英叟和尚に見込まれてそこの後住に懇望された。それを斷つて歸國しようとすると、それなら兼ねて頼まれてゐたことだから、品川のかういふ寺に行つて暫く手傳つて行つてくれと云はれて、それをも斷りかねて歸國の途中少時のつもりで立ち寄つたのが、品川の東海寺であつたといふのです。

私の父は尾張の在方の相當裕福な織物屋の二男に生れましたが、父の父が長男よりも二男の父の方を愛し、長男を他家へ養子にやり、二男の父に家を襲がせようとした。それを遁がれるために出家したのが、父の佛門に入る動機でありました。

そのころ、東海寺は、明治廢佛の犠牲となつて、開山澤庵和尚以來由緒ある大方丈、綱吉將軍によつて再建された本堂世尊殿、さては三門の潮音閣など、片はしから打ちこぼたれて見るかげもなく、十七箇寺の子院も殆んどつぶれて淺茅ケ原と荒れはて、僅かにのこる筆頭子院の玄性院といふに東海寺の寺名を移し、その玄性院の住職であつた圭窓和尚が東海寺の住職としてたつた一人殘り、あとの僧達は大抵還俗してしまつた。さういふところへ、もう一人田舍出の僧が加はつた。それが私の父であつたのです。圭窓和尚は、その頃廢寺同樣になつてゐた同じく子院の一つである春雨庵をも兼務してゐましたが、その方を父にまかせ、何時の間にか自分の弟子といふ

ことに屆けてしまひ、父を春雨庵の住職といふことにしてしまつたのです。私の父はかういふ不思議なめぐり合せで、思はざるにこの貧しき寺に住むべく餘儀なくされてしまつたのです。

わが母のこと

私はつい父のことを云ひ出してしまひましたが、序でに母のことも一言いはして頂きませう。それでないと、私と禪庵との因緣がはつきりしませんし、また、この事は私の子供らのためにも書いて置きたいと思ふのです。

僧侶の妻帶問題が先き頃やかましく論議せられましたが、僧侶の妻帶は明治の初年に公認せられてをります。僧侶が釋氏をすてて、俗姓を名乘り、兵役の義務を有するやうになつたことは、嚴密な意味に於ける世捨人たる僧侶でなくなつたことを證明してゐます。ただ長い傳統と習慣と一種の信念によつて今日に至るまで僧侶の一部に非妻帶者が存在してゐるに過ぎません。

私の母は素性の正しい歴(れつき)とした家柄の出であります。九州の大藤Hといふ大名といへば、どなたにもすぐお解りでせうが、その分家に同じくHといふ大名があります。私の母方の祖父はこの大名の三男坊に生れましたが、四十二の二つ兒といふ昔風の迷信の犠牲となつて生れ落ちると、そのままその大名の家老職をつとめてゐた緒方といふ家に、扶持つきで養子にやられました。主家の若樣といふことで大切に育つたためか、長ずるに及んで大酒家となり、その伉儷(つれあい)たる私の祖

母に當る人は笠間といふ同藩の儒者の女で、私の母を頭に三人の女を殘して西南戰爭のさ中に歿し、祖父が一家をまとめて東京に出て來た時は、母は十二三歳で、その頃深川の常磐町に屋敷を持つてゐた祖父の生家たるH子爵家に養はれることになつたが、祖父の方は敬遠されて、役所勤めをしてゐたその長男（母の異母兄）と共に暮し、長男が地方に轉任することになつて遂に品川のさる荒寺の一間を借りてわびしい一人住ひをすることになつた。その荒寺こそはいふまでもなくこの禪庵なのであります。

そこには、已に私の父が若き住職として住ひ、父と祖父とは懇意となつた上に、そこに時折たづねて來たその寺の檀家T子爵家の家扶小倉老人と祖父とが近づきになり、そんなことで私の母は、その小倉老人の媒介でこの寺に、私の父のところに嫁ぐことになつたのです。

妻帶といふことを昔から認めてゐない宗派の僧たちが、明治以來どんな方法で妻帶したか私は知りませんが、少くとも私の兩親が正しき結合であつたといふことを、私の子供らのために、子供らの將來のために書き殘して、その純粹性を明らかにして置いてやりたいと思ひます。

禪庵の修繕

くだらぬ私事を永々述べて失禮しました。貧乏寺の話をしてゐる中に、思はぬ横路に入り込んで、とんだ樂屋落を申上げました、お許し下さい。

さういふ譯で、私はこの寺で生れたのです。生えぬきの寺の子です。だから私はこの寺を大切に思ふのです。いろいろの苦しさをしのびつつ、この寺を今日まで維持して來た所以であります。

苦しい貧乏話をもう少し聞いて下さい。前に申したやうに、荒れ寺を父があちこちと繕ひ、苦しいやりくりをしつつ、ともかくも五十年持ちこたへて來たところへ、あの大震災でした。幸に倒壞は免れたが破損は甚だしく、それをまた應急のつくろひをして昭和五年まで來ましたが、もう、どうにも我慢が出來なくなり、丁度その頃府の事業として、すぐ前の目黑川の改修や環狀線道路の鋪裝工事などが始まり、境內の一部分が、東京府に買收されて、やや纏つた物が入る見込みがついたので、思ひ切つて修繕改築にとりかからうとしてゐる矢先きに、父が八十七歳で老衰のために亡くなりました。この邊で父のことを佛家なみに良隱和尙と呼ぶ事にしませう。良隱和尙の一生は勤儉と忍辱の一生でありました。色のついた法衣を着られる身でありながら、一生涯黑い衣で通しました。貧乏な寺に居りながら、檀家から寄附を貰ふことが嫌ひで、我れと我が身を苦しめて儉約に儉約して、どうにかやつてゆきました。私が父の死後、禪庵の修理をするに當つて、一番困つたのは、檀家に對するこの方面の訓練が出來てゐないことでした。この頃は、檀家も時勢についての理解があり、檀家自身もそれぞれ家道を恢復してをり、寺に對して少なからぬ同情を持つてゐてくれたのですが、何しろ一度も寄附を貰つた事がないので、どうも云ひ出しにくく、しかしともかく禪庵始つて以來の大修繕をすることであるから、檀家に一應話して見よ

うと思つて、總代の人々に話して見ましたが、一人として色よい返事をしてくれる人はありませんでした。乘り氣になつて世話してくれようといふ人もありませんでした。私はこの時ほど、自分の不德を痛切に感じた事はありません。私はつくづくお寺がいやになりました。とは云へ自分の生れた寺ですから、放つとくわけに行きません。そこで悲壯の涙をのみつつ寺の修理を自分の勝手にやりました。人が聞いたら笑ふでせう。何といふ大馬鹿だ。寺は個人の所有ではない。檀家あつての寺でないか。檀家から金を貰ふのは當然過ぎるほど當然なことだ。自腹まで切つてやる奴があるものか。それは解つてゐます。一度や二度賴んでよい顏をされぬからとて寄附を貰ふ事を斷念するなんてお目出度い話だと笑はれるかもしれません。それも解らぬではありません。ねばる上にもねばらねば駄目だといふことも知つてはゐますが、そんな保險の勸誘員のやうなことは、私には出來ないのです。一體寺への寄附は喜捨であるべきで、賴まずとも、先方から持つて來るのでなくては本格でない。それが出來ぬくらゐなら、寄附は貰はなくともよい。そんな風に私は考へました。

私もこれで、頭でもすりこくつて、墨染の衣でも着こんで、女房や子供もなく、菜つ葉大根で禪僧らしい閑素枯淡な生活をしてゐるのであつたならば、晩に食べる飯がないからと云つて、檀家に行つて一飯ふるまつて貰ひもしようし、年末には餅代がないからとてねだりに行つたり、雨漏り、疊替と飛び廻つて零細な寄附も集めもしようけれども、そして檀家も喜んで、それこそ喜

捨してくれるでもあらうが、現在の私のやうに、洋服など着て、學校の敎壇に立つて、大學、高專の學生から假にも先生と呼ばれ、學校から生活を保證して貰つてをり、禪庵では家内や子供等を側に置いて、たまには晩酌の一杯もやり、時には家族づれで映畫位は觀にゆく私であつて見れば、如何に貧乏寺とは云へ、檀家に對してお寺風吹かして物乞ひめいた恰好も出來ぬではありませんか。痛し痒しとはこの事で、策を知つて策の施しやうが無かつたのです。

そんなわけで、檀家から寄附を貰ふことは思ひ止まつて、なんとか寺の自力で支辨して昭和五年の十二月に造修の業を卒つて、禪庵の外觀を一新することになりました。更生した禪庵の樣子は拙著『禪と社會』中の「禪庵生活」に書いてありますから、ここには繰り返しません。

第二の難關

貧しい禪庵にとつて大きな負擔であり、禪庵を護る私どもにとつて苦しい一つの試煉であつた修理の仕事も一通り終つて、やれやれと思つてゐるところへ、思ひもよらぬ大きな難題がまた新しく生じたのであります。

目黑川改修工事並びに環狀線道路鋪裝工事について、受益者として負擔金を府に納めなければならなくなつたことであります。

前に申したやうに、目黑川改修のため、禪庵の土地と建物（貸家です）とが東京府に買收にな

り、そくばくの纏つたものが寺に入つたので、それを以て先づ門前に長屋を新築しました。禪庵維持のために先住が建てて置いた長屋が取壊されたので、それを復興したのです。それから禪庵の修理にかかつて、本堂の根本的大修繕と、庫裏の新築と附屬建物の移轉とを斷行し、その工事の中に府から貰つた金を使ひ果たしたのみならず、先住が遺した物にまで手をつけてしまひました。先住のものを後住が自由にするに何の不思議はありませんが、それでも冥利といふことがありますので、その年に生命保險に入つて、三十年後にその穴埋めをする事にしました。

かうして背水の陣を布いてゐるところへ持つて來て、府から負擔金割當十箇年賦支拂の通知書がとどけられました。そしてその總額は龜の年の半分、鶴の年の五倍に當ります。怪しげな鶴龜算ですが、とにかく十年間にそれだけの多額を支出することは、大仕事をした後の禪庵にとつては大變なことでした。かうと知つたら、修繕の方をもつと手輕にして置けばよかつたと思つたが仕方がない。地益税の事は前から聞かされてはゐましたが、かうまで多額とは思つてゐなかつたのです。ですから、その通知をうけた時は全く驚きました。なにしろ年額五百といふものを府に拂ひ込まねばならぬのですからね。何とか輕減の道はないかと府に行つて事情を話して見たが、こちらのいふ事など聞いてはくれず、さうしてゐる中に督促狀が舞ひ込むやうになり、氣が氣でなく、檀家の主だつた人々に話して見たが、一人として相談に乘つてくれる人はなく、殆んど當惑してしまひました。

この時、私は最も力強い相談相手、協力者を私の身近に見出しました。それは荊妻でした。彼女は鏡臺の抽出から黄金一包を取出すやうな氣の利いた事はしてくれませんでしたが、銷沈してゐる私を勵まし、禪庵の修繕をやつて退けたあの意氣で、この第二の難關をも突破しようではないかと申し出ました。そしてその方法としては、寺の收入の全部を擧げて府への負擔金に充當する事にし、今後十年間は一文半錢、寺の收入は使はぬことに定め、それを彼女は確實に實行して、今日に至りました。

寺の收入とここで申したのは、盆、暮、彼岸の附屬、それに葬式、法事、塔婆料等を合せたものです。これを合せると府への負擔金がどうやら拂へるので全部それに振り向けました。これによつて見ても、我が禪庵の收入がいかに少いかが解りませう。長屋の收入は、税金や保險料や老母への隱居料その他諸雜費になつて、殆んど殘るところがありません。これでは禪庵六人の寺族が粥もすすれぬ事になるのですが、有難いことに私には學校の俸給があるので、それでどうにかこの十年間生活だけは支へることが出來たのです。

その負擔金問題が起つてから、早くも十年の年月が經過しました。苦難の十年でした。その間、着々と年二回の府への拂込を濟ませて行つて、恰も今年（昭和十六年）の十月で目出度く全額皆納濟みとなりました。苦難の十年がここにやつと終止符をうちました。この十年間、この面倒なやりくりには、私自身は全く關係せず、私が學校の仕事や、學問のことや、著述の仕事などに沒

頭して、不愉快な金錢のことなど殆んど忘れてゐる間に、家族の一人の女性の手によつて、十年間きちんきちんと拂ひ込まれて行きました。そしてその仕事が今や完了したのです。私はこの機會にその女性の勞を多としてやりたいと思ひます。

この十年間、私の誦んだお經のお布施の全部、私の書いた塔婆の料金の全部、二季の附居の全部を私は包紙のまま妻に渡して一切を省みませんでした。それらがすべて纒められて、年二期に府に納められたのです。

禪庵にとつての苦難の十年は終りました。私はこの機會に先づ檀家の方々に感謝したいと思ひます。この十年間禪庵が東京府へ納入した負擔金の全部は、檀家の方々のお布施に外なりませんでした。禪庵の負擔金を支拂つたのは、私どもではなくて、檀家の方々でした。私どもはこのお取次をしたに過ぎません。檀家の方々が寺へ納めるものを納め、各位の祖先への佛事供養を忘りなく營まれたればこそ、わが禪庵は府への義務を果たすことが出來たのです。故に先づ檀家に對して御禮を申さねばなりません。

次ぎに私は、私の勤先である早稻田大學に對して心から感謝いたします。私どもの生活が大學によつて保證せられてゐるといふ强味があつたればこそ、寺の收入の全部を府へ振り向けて安閑としてゐられたのです。まことに有難く思ひます。大學を有難く思ふにつけ、更に更に感謝の念を禁じ得ないのは、今から二十餘年前に、ふつつかな私を早稻田大學の教師に推薦して下すつた

五十嵐力博士の御恩であります。私共が苦難の眞只中に立つた時、その恩を最も强く感ぜずにはゐられませんでした。

第三に、私は「東京府」に對して感謝します。十年間も負擔金を徵收されて苦しい思ひもしたが、それによつて公に對する義務を果たすと共に、世の中のよい經驗を積むことが出來ました。

最後に、先住の良隱和尙に感謝します。先住に借金殘されても文句は云へぬところへ、そくばくながら遺產を殘して貰ひ、それによつて積年懸案の禪庵の修理改築を完遂することを得ました。ただこの完成を一目見せることの出來なかつたのは返すがへすも遺憾であります。

かう考へて來ると、世の中といふものは、實に重々無盡の關係にあることが解ります。自分一人でやつたと思ふことが、何ぞ知らん、直接間接、有形無形に、大勢の人々の力を借りてゐるのです。一(いも)はそのまま一切であつたのです。苦しいと思つた事が、そのまま有難いうれしい事なのです。私は佛教にいふ緣起の理を信ぜずにはゐられません。ものに定相なき空無相の理を信ぜずにはゐられません。そこに不平不滿が影を消し、ただ光明と感謝とが殘ります。

あとがき

寺にゐて學校につとめ、坐禪をやりながら學問にいそしみ、宗教にたづさはりつつ教育に從事してゐる、これが今の私の生活である。どつちつかずの鵺的生活といへば云はれぬこともあるまい、不純といへば不純ともいへるであらうが、私にはこれが實にしつくりうまく、工合よく身についてゐるのである。そのしつくりとした工合のよさから私の隨筆は生れて來る。

『坐禪十年』もその例に漏れない。

今のところ私の生活の基準は坐禪である。坐禪を中心として私の物心兩面、眞俗二諦の生活は營まれる。この中心を脱さぬかぎり私の生活にくるひは來ないであらう。私にこの安定感をあたへてくれたのは十年の坐禪である。よつて最初に「坐禪十年」をかかげ、それを以て書名とした。

昭和十七年三月三十日
先住良隱和尙十三回忌の日
春雨庵に於いてしるす

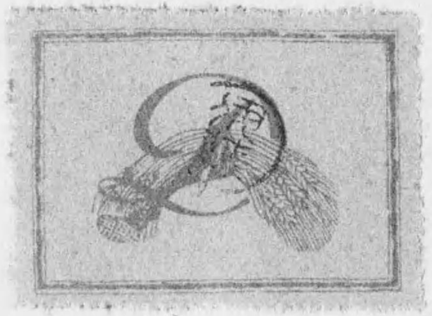
著者

943
52

坐禪十年

出文協承認
ア50004號

昭和十七年六月一日印刷
昭和十七年六月五日第一刷發行（五千部）



會員登錄番號
一一六五〇八

・誤丁の際は直接本社にてお取替致します。

㊟定價一圓六十錢

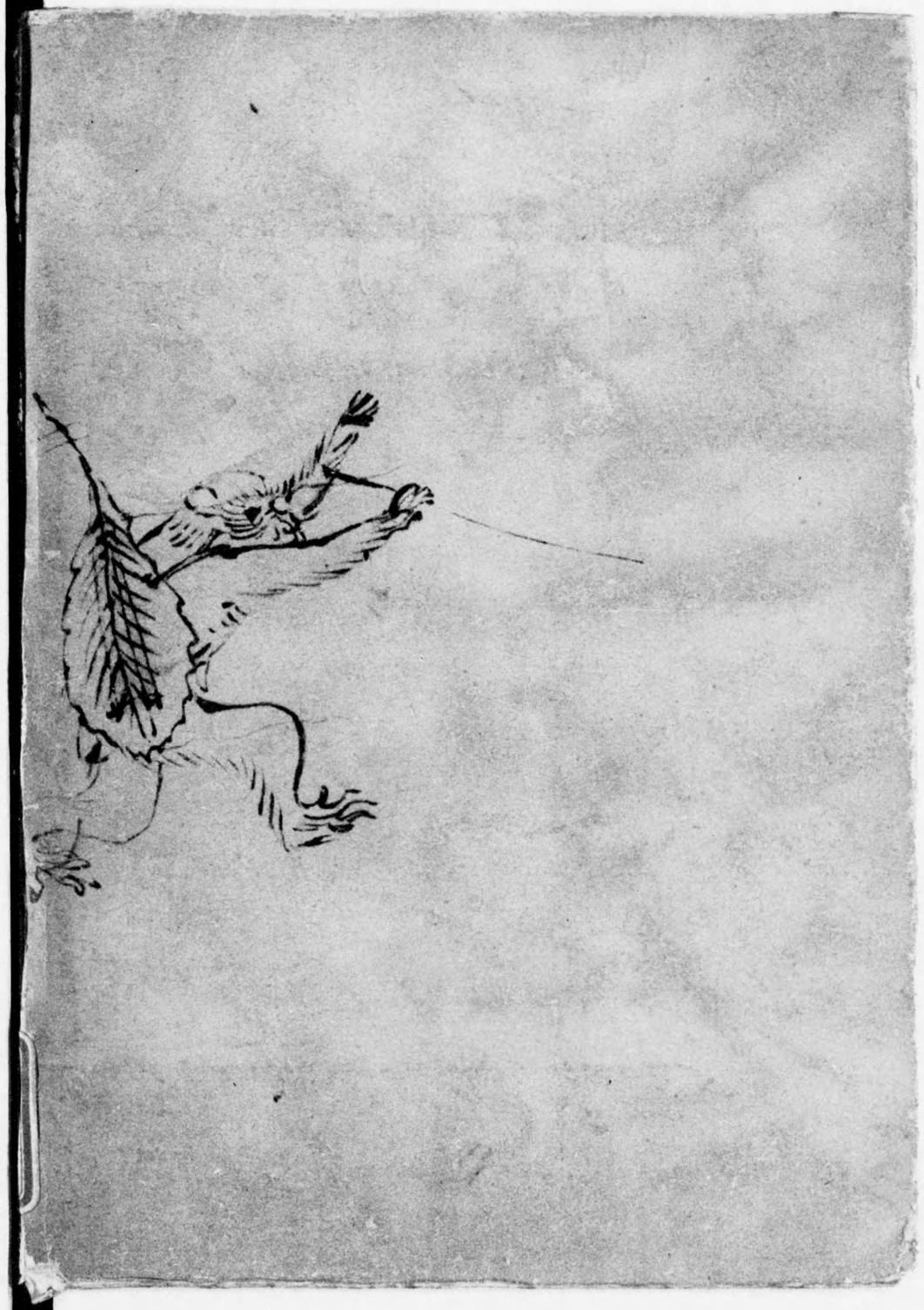
著作者　伊藤康安（イトウカウアン）
東京市麴町區三番町一

刊行者　長谷川巳之吉
東京市麴町區三番町一

刊行所　第一書房
振替東京六四二三三
電話九段三一四一五
三三四四

東京市銀座數寄屋橋
發兌　第一書房
電話京橋五九八七

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

印刷者　東京市牛込區山吹町一九八　藤原芳雄

終